

**モブ男が性知識の乏しいミカサに勃起の治療
と言ってセクハラして
最終的にラブラブエツ
チする話。**

サンプル

1

とある空き部屋。

訓練後に男はミカサを呼び出し、今二人っきりで部屋の中にいる。

「ミカサ、まずはこれを見てほしい」

男はズボンのチャックを開け、あらかじめ自慰行為をして強制的に肥大したペニスを取り出す。

いきり立った肉棒は顔面射精をしたいかのようにミカサの顔を見つめている。

「……………それがなに？」

眉間に皺を寄せて軽蔑するような眼差しでチンポを睨みつけて、吐き出すように問いかけてくるミカサ。

(怖～、やっぱ迫力ヤバいなこの筋肉女。だけど、この状況でも殴られないってことは…)

「いや、そのさ、ミカサを見るとコレがデカくなってスゲー痛えんだよ。で、調べてみたら精液^だって言うのを射精せば収まるらしいんだ。でも自分じゃ中々射精^だせなくてさ、その……ミカサにもこいつの治療を手伝って欲しくて」

「……」

怪訝な表情を崩さずにチンポを無言で見つめるミカサ。

(大丈夫なはずだ。これまでミカサと話すときに何気に性の話題を振ってみたが、そこまですら反応はなかった。行為自体は知ってると思うけど、性知識自体は乏しいはずだが……)

これまでの男の調査でミカサの性知識が乏しいことは分かっていた。

そこに望みを掛けて自分の欲望を満たす為にミカサを誘ってみたのだが……

「それ、痛いの？」

「え？ あ、ああっ、めちゃくちゃ痛い！ ミカサのことを考えたり、ミカサを見たりす

るとデカくなっちゃまって、自分で何とかしようにも思うようにいなくてな……だから思い切って相談してみたんだけど」

相変わらず怪訝な表情は崩さないが少し男を心配するような声色で問いかけるミカサ。

そのミカサに対してあくまで仕立てに反応する男。

「……………手伝うって、何をすればいいの？」

「っ！？ 手伝ってくれるのか！？」

「私ができる範囲なら……いい。痛そうだし」

「助かるよミカサっ！！」

少し逡巡した後、ミカサは手伝うことを了承してしまう。

ミカサの優しさに付け込んだ男は早速自分の欲望を満たす為に、チンポの治療を手伝ってもらう。

「くっ……こんなことが……本当に」

ミカサは男に言われて、ガニ股で中腰の姿勢になっている。

その股下に男は座ってミカサのズボン越しの秘部に顔を擦りつけている。

「んはっ……こうやって興奮することによって……はぁ……精液を早く射精することができるから……早く終わるためには……はぁ……これが必要なことなんだ……」

「んっ……早く済ませて」

歯を食いしばり不快感をあらわにした表情で、^{ひぶ}秘部からの感触を我慢するミカサ。

そんなミカサの不快感などお構いなしに男は顔面を尻や秘部に擦りつける。

(やばっ！ 訓練終わりの蒸れたミカサの股間、汗臭いけど、マンコのメスの匂いもしてたまんねえ～)

実際ミカサの股は訓練終わりのまま来たせいで、汗をかいて蒸れており、股間の匂いとも合わさって独特な官能を刺激する匂いを放っていた。

男はミカサの尻を両手でソフトに叩き、そのまま自分のものだと主張するように尻全体を撫でまわす。

「くうっ……」

ミカサの嫌悪を現した表情はどんどん強くなり、歯を食いしばっている。

(くう～この尻、筋肉スゲー～くせに尻はめっちゃ柔らかえじゃねえかよ。絶対モノにする！！)

他の娘よりも少し大きいミカサの尻。

ズボン越しでもデカく柔らかいムレ尻を指を動かし揉み解していきながら尻全体を楽しむ男。

すでにこの時点で股間の匂いや尻の感触、さらには嫌なのに手伝ってくれているミカサの嫌悪感たっぷりの表情が脳を刺激して官能的興奮は高まり、触っただけで射精しそうになるくらいチンポは興奮で肥大していた。

(ヤバイ、これ扱いたら絶対すぐ射精る奴だ。でも……)

調子に乗った男はミカサの尻を鷲掴みにしても見込みながら、ズボン越しにも拘らず、ミカサの秘部に口を付け、思いっきり吸い込む。

「じゅちゅ……ぢゅっ……じゅるっ……んっ……じゅるうううう！！」

「うっ！？ くっ！ なにしてっ……」

男の行動に理解できないミカサは、秘部の不快感に抗いながら下半身を震わせる。

(蒸れた……股間の汗の味が……頭に直接響いて……うまい、うますぎるっ！！！ これ
がミカサの味っ！！！)

ほとんど布の味しかしないはずだが、ミカサが着ているズボンという事実が味付けされ、それから染み込んだ汗の味を吟味するかのよう楽しむ男。

(さすがにやばいっ！！)

「んつまっ……ミカサ、悪い、ミカサのズボンのベルト緩めといてくれないか？」

「必要あるの？」

これ以上身体を触るのなら殴らんと言わんばかりの感じで問いかけてくるミカサ。

「早く治療するためなんだ。ミカサも早く終わらせたいだろ？」

「……………くっ、わかった」

治療のためだと自分に言い聞かせるように渋々了承してベルトを緩めていくミカサ。

ミカサがベルトを緩めたことを確認して男は立ち上がりながら肥大した肉棒を扱っていく。

(ヤバすぎ、これ絶対人生で一番射精するな)

今まで想像でしかなかったミカサの尻を触り、さらにはズボン越しとはいえ、秘部の味を感じたことによって金玉は膨れ上がり、我慢汁があふれんばかりに出ており血管が浮き出た肉棒は破裂せんばかりに肥大している。

「くううあっ！！」

限界まで射精を我慢しながら右手でチンポを扱き、左手でミカサの尻を強く揉み解す男。

「早く……射精して」

不快感から解放されたいがためにミカサが放った一言なのだが、男には早く射精してほしいと精液を欲しているように聞こえてしまい、興奮が倍增する。

「くあっ！！ ^だ射精すぞ！！！！！！！！ ミカサっ！！！！」

射精しそうになる寸前、男は左手でミカサのシャツの後ろの部分をはだけさせ、指をズボンの中に入れてパンツごと後ろに引っ張る。

「っ！！！！ なにをっ！！！！????」

「^だ射精するんだっ！！！！ この中にっ！！！！」

ミカサのズボンを少し下げ、左側の生尻が見えるパンツの中に肉棒を向け思いっきりパンツ内に射精する。

ドピユっ！！！！ ドピユピユっっっ！！！！ ドピユ！！！！ ドピユ！

「うわあっ！！ あっ……あっ……ああ」

「熱っ、何……これ……」

大量の白濁精子がミカサの生尻に当たりパンツ内へ一滴残らず射精される。

すさまじい熱さの精液が勢いよく自分の尻に射精されて啞然とするミカサ。

「はあ……はあ……はあ……」

(人生で一番射精した……ヤバいくらい出た……死ぬかとおもった……)

ミカサに射精するというあまりの快楽に気を失いそうになるくらいの虚脱感に襲われる男。

だがまだまだ射精したりないのか、肉棒は依然といきり立った姿を見せている。

男は射精が終わったミカサのズボンを元に戻して、パンツ内に残った精液を尻にマーキ

ングするようにしてズボン越しに尻を叩きながら撫でまわす。

「こんなこと治療に必要なの？」

怪訝な顔をしたミカサが歯を食いしばりながら問いかけてくる。

「もちろんだよミカサ。これがすごく興奮して射精を促してくれるんだ。それに男の精液は擦り込むことによってリンパを刺激して身体のコリをほぐしたり、筋肉に良かったりするんだ」

「.....お尻は別にコってない」

「いやいや、意外と座ったりしてコッてることが多いから、こういうときぐらい尻に優しくしないと」

訳のわからないことを言いながら男はミカサの尻を揉み続ける。

嫌悪感を露にしているが、男の言うことを受け入れて尻を好き放題もまれるミカサ。

その背徳感のある状況に下っ腹が熱くなり、さらにまた肉棒は肥大化していく。

「射精したからもう終わりでしょ。早く手を離して」

一回射精すれば終わりと思っていたミカサが、治療の終了を告げてくる。

だが男はまだまだ終わらないと言わんばかりに怒れた肉棒をミカサに見せつける。

「ごめん。まだちょっと痛みが引いてなくて.....次はキス.....じゃなかった。異性の唾液を飲めば早く治るはずだから、ちょっと口と口を合わせてもいいかな？」

それを聞いたミカサの目がより光を失い男を侮蔑の眼で見つめるが.....

「口と口を合わせる？ それはキスじゃないの？」

怒りや嫌悪感、不快感なども交えた眼差しと声色でミカサが問いかけてる。

まるで黒いオーラを放っているような雰囲気にはさすがの男はビビってしまうが、ここで引いたらセックス基ラブラブセックスまでたどり着けないという思いが押し勝ち、男を勇気づける。

「いやいやいや！ キスはほらっ！ 恋人同士がすることだからね。これはあくまで治療。人工呼吸みたいなものなんだ」

「人工呼吸？」

「そうそう！ 治療だからね。異性の唾液を摂取することでチンポの痛みを緩和できるんだ！ それに興奮が増えて早く射精もできる！ チンポを治療する上で唾液を摂取するこ

とは必要なことなんだよ」

眉間に皺を寄せて逡巡するミカサ。

「……………ゴクツ」

生唾を飲みながら緊張の面持ちで返答を待つ男。

ミカサは男のチンポと顔を見比べている。

「本当にそれ痛いのか？ さっきからあんまり痛がってるようには見えないけど？」

「そっ、それはほらっ！ ミカサの汗を摂取したからだよっ！ それによって痛みが少し和らいでるんだ！ でもこのままじゃまたすぐに痛くなって夜も眠れなくなるから！」

ミカサはチンポを睨みつけている。

男の性器を見るのは初めてであり、まして完全振る勃起状態で赤黒く肥大したペニス。

知識のないミカサにとっては、今の状態のペニスは確かに痛みを帯びていてもおかしくない状態の見た目になっている。

「汗で痛みが消えるなら汗を飲むだけでいいんじゃないの？」

「そりゃミカサが飲ませてくれるならもちろん汗もいっぱい飲むよ。でも汗を飲んだうえで唾液も飲めばさらに効果が上がって治療も早くなるんだ！」

「それなら私が唾液を垂らすからそれを飲めばいいでしょ。わざわざ口と口を付けなくても」

「空気に触れていない唾液じゃないと治療には役に立たないんだよ。だからなるべく口を合わせて唾液を移さないといけないんだ」

なんとかキスをしたくないミカサが別の方法を提案するが、それを男が巧みにかわしてキスへと誘導していく。

歯を食いしばり何か他に方法はないか逡巡するミカサだが知識がないため何も浮かんでこない。

「頼むよミカサ。こんな恥ずかしいことミカサじゃないと頼めないんだ。ミカサを見るとチンポも痛くなるし。助けると思って。な？」

下手に腰を低くしながら申し訳なさそうに頼む男。

その姿を見ても怪訝な表情は変わらないミカサだが、

「……………わかった」

「っ！？ ありがとうっ！！ 助かるよっ！！」

ミカサは男とのキスを了承する。

さっそく男はミカサ近づき両手を腰に回して優しく抱きしめる。

「んっ……」

抵抗はしないものの少し顔を歪めるミカサ。

両手は特に動かさずにだらんとして、ただ立っているだけの状態だ。

(ミカサがこんな近くに……身体、意外と小っちゃいな……胸に少しくらいくっついてもいいよな……)

少しだけ男の方が身長が高くミカサを見下ろす形になっている。

ミカサは男を上目遣いで見上げる形になっており、少し表情はこわばっているが端正な顔立ちが見つめていることに対して男の興奮は増す。

(顔やっぱ綺麗だよな……唇もプリプリじゃん)

興奮が増してミカサを抱きしめる力が少し強くなり、勃起チンポをミカサの股間部分に押し当てる。

「……んっ」

そのチンポの感触に気づいたミカサはまた怪訝な表情が強くなり眉間に皺が寄る。

「ミカサ……それじゃ、口、開けてくれるか」

男にそう言われて視線を逸らし少し考えためらいの表情を見せた後、再び男を見つめて意を決したようにゆっくりとミカサは口を開ける。

(うっわ……)

ゆっくりと開かれたことによって、ミカサの舌に粘ついた唾液の糸が口内で垂れる。

綺麗な白い歯も唾液の粘り気で卑猥に見えてしまう。

唾液によって光沢を帯びた口内は、そのきれいな顔立ちには似合わず卑猥な形状をさらけ出しており、ギャップで興奮した男のチンポはさらに硬さを増していく。

(工口過ぎだろ！ なんだよこの口！ 絶対チンポ突っ込んでやるからな！！！！)

「……ゴクッ……いくぞ……ミカサ」

男が宣言するとミカサは眉間に皺が寄っているが、目を瞑りキスの受け入れる。

男はその卑猥な口へゆっくり自分の口を付ける。

「んっ……ちゅっ……くちゅ……くちゅ」

初めてのことでさすがに男もひよっているため、最初はソフトにミカサの口内へ舌を侵入させる。

男はミカサの優しく歯をなぞるように舐めていきながら口内の唾液を味わっていく。

(ミカサのファーストキスだよな……ていうか甘っ！ 口の中トロトロで……やばっ……めちゃくちゃ興奮してきた！)

ファーストキスの味を堪能する男。

実際に甘さはないが、憧れのミカサとキスをするという官能行為が脳を錯覚させて甘さを感じさせる。

痺れるような快感を感じながら、調子に乗った男の舌は勢いよくミカサの口内を犯しにかかる。

「んちゅ……じゅるっ……んっ……ぢゅるる……んあっ……くちゅ……んっ……ちゅう……」

男の舌がミカサの勢いよく口内を這いずり回る。

まずはミカサ下の歯の歯茎をなぞるように奥歯側から舐めはじめ、反対側の奥歯まで行った後、また往復する。

途中途中で綺麗な白い歯も味わっていきながら

そして次は上の歯の歯茎でも同じように往復して味わい嘗め尽くす。

(ミカサとキス！！ キスっ！！ 味わい尽くしてやるっ！！)

興奮が高まった男は先ほどよりも強い力でミカサを抱きしめる。

それに驚き、不快感を我慢していたミカサは一瞬男に殴りかかろうとしたが、我慢して拳を握りしめるだけに至った。

だがミカサの表情は歪み細めを開けて、自分の口の中を犯し這いずり回る舌の不快感を必死に我慢している。

そんなミカサのことなど気にせず男はより身体を密着させてキスを楽しんでいる。

「じゅるるっ……んちゅ……んあっ……んっ……れろっ……んっ」

(キスもヤバいけど、ミカサの身体の感触も最高だなっ！ おっぱいやわらけー)

身体全体が当たっているため、当然胸も重なり合い、男はミカサの身体の感触も楽しんでいる。

興奮は高まり、より硬くなった卑猥な肉棒がミカサの股間に押し当てられる。

そのチンポの感触を避けようとして、ミカサが若干もじもじしだすが、男はさらに強く抱きしめて逃がさないようにする。

「んちゅっ……ぶあっ……はぁ……はぁ……」

「んっ……ふう……終わり？」

「いや、そうじゃなくて、ミカサも舌を動かしてみてくれないかな？ ベ口とベ口とが絡み合った唾液が一番チンポに効くんだ」

意味不明なことを言っている男の言動に顔を歪めるミカサだが、少し考えた後、了承したかのように口を開いて目を瞑るミカサ。

そしてまた治療という名のディープキスが始まる。

「んじゅっる……くちゅあ……くちゅ……ぢゅうう……じゅるっ」

「んっ……んあっ……じゅるっ……れろっ……」

弱弱しく遠慮がちな動きのミカサの舌を犯すように男の舌が口内でねちょねちょと絡み合ってくる。

ミカサのベ口の舌に溜まっていた唾液を、流れるような舌の動きで自分の口内へ移し唾液の味を楽しみながらミカサのベ口を犯し続ける。

(ミカサとベ口チュー!!! やばいっ!!! これっ!!! 気絶しそうなくらい気持ちいいっ!!!)

室内にベ口が絡み合う淫音が鳴り響き、その音が男のチンポを刺激して興奮を高める。

「くちゃっ……くちゅ……ねちゃあ……れろっ……んちゅ」

「くちゅ……くちゃ……んっ……んあっ……んっ」

遠慮がちとは言え、ミカサが自ら舌を絡めてきているという事実がさらに興奮を増幅させ、我慢できなくなった男は、肉棒をミカサの太腿の間に入れ素股の状態になる。

「んっ!!! んっ……ちゃっ……くちゅ……」

一瞬驚いたもののキスを続けるミカサ。

我慢できなくなった男はミカサのデカ尻を両手で鷲掴みしながら腰を振りはじめ、ディープキス素股を始める。

(ミカサっ！ ミカサっ！！ ミカサっ！！！！ 尻もデカくて、顔もかわいくて、筋肉汗臭女っ！！)

不快感で眉間に皺が寄りまくっているが、必死に耐えながら男の欲望を受け止めるミカサ。

「んちゅ……くちゅ……んっ……じゅるっ……」

男はミカサの唾液を貪り、尻の感触を楽しみながら腰を振り続ける。

男が揉みしだくミカサの尻は卑猥に動き、好き放題されている。

不快感を我慢しているので、自然とミカサの太腿は力強く締まり、それがさらにチンポを刺激する。

(くあっ！！ 太腿の締まりっ！！ 超気持ちいい！！ これっ！！ もうっ！！ 限界だっ！！)

くちゅ！ くちゅ！ くちゅ！ くちゅ！

男の我慢汁があふれんばかりにミカサの太腿を濡らして、お互いの股間部分から擬似セックスの淫音が漏れ出てくる。

射精が近いと感じた男はディープキスしている舌の力も強める。

そして、ミカサの舌先が少しだけ男の口内に侵入してきたの狙って、男はミカサの舌を思いっきり唇で食いつき、吸い上げる。

「じゅるるるるるるるる！！！！！！」

「んあっ！！！」

驚いたミカサを目を見開く。

男は伸びているミカサのペロをさらに強く吸い込み自分の口の中へ招待する。

(ミカサっ！！ ミカサっ！！！！ ミカサっ！！！！！！)

自分の口の中に入ったミカサの舌を思いっきり吸い上げながら、腰を力強く動かして男の肉棒から精液が勢いよくあふれ出す。

ドピユウウウウ！！！！ ドピユっ！！ ドピユ！！！！！！

ミカサの股下から精液が勢いよく飛び出し床に散っていく。

「ぷあっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

「んあっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

(やべー……意識……飛ぶかと思った……)

お互いに少し放心状態となった後ミカサが口を開く。

「これで……もう……終わりでしょ……早く離れて」

男の胸を押すように主張してくるミカサ。

「いや……まだ……あと一回は射精しないと……いけないんだ」

「くっ……まだこんな気持ち悪いことする気なの？」

「ごめん……でも……ミカサじゃないとだめだから……ベ口……伸ばしてくれる？」

今にも殴りかからんばかりの怒りの表情を露にしたミカサだが、自分の股に挟まっている肉棒の相変わらずの硬い感触を感じて、無言で目を瞑りベ口を伸ばすミカサ。

「れーろっ……れろっ……れろっ……」

その卑猥な光を放ち伸びた舌を味わうように自分の舌で舐め始める男。

もはや唾液など関係ないにも関わらず、ミカサは男の言うことに従ってしまっている。

「れろっ……れろっ……んあっ……れろっ……んじゅるっ……じゅるるるるる……」

射精後の脱力感を感じながらミカサの舌を吸ったり舐めたりして味わい、官能による幸福感が男の脳を刺激する。

(ベ口うますぎだろ……今日のラストはやっぱ……腹筋だな)

「じゅるるるっ……んあっ……れろっ……れろっ……」

眉間に皺を寄せて不快感を出しているが、ミカサの顔が少しだけ赤く火照っていることに男はまだ気づいていない。

「くちゅ……くちゃ……あっ……んっ……んあっ……れろっ……」

素股で射精し終わった後も、男は夢中でミカサの口内を犯し続けていた。

(やばっ……ミカサとのキス……気持ちよすぎて……怪しまれないように……しなきゃいけないのに)

男はミカサの背中に腕を回し力強くがっちり抱きしめて、ミカサの身体と完全密着の状

態でディープキスをしている。

早く終われと言わんばかりに眉間に皺を寄せ、顔を歪ませながらも、目を瞑り男との濃厚なベロチュウを受け入れているミカサ。

ミカサの舌に男の舌が執拗に絡みつき、常に粘っこくざらついた食感がミカサの脳へ伝わり不快感は増していくばかり。

時折かわすようにして頭を動かしても、男はしつこく唇を重ねてきて逃げられない。

「れろっ……くちゃ……んちゅ……じゅるっ……んっ」

口の奥へ逃げるミカサの舌を、男は舌に最大限力を込めて自分の方へ引き寄せようとするが、なかなかできない。

(くそ……ベロ引っ込めやがって……こうなったら)

今度はベロが奥へ行ったことにより、ベロの下の柔らかい部分を男の下で力いっぱいミカサのベロに沿うように舐める。

「んっ！！ んっ……」

舌を奥へ逃がしたことにより、ミカサのベロの下の部分にどんどん唾液が溜まっていき、その溜まった唾液を男は舌を使って自分の口内へと流し込んでいく。

「んっ！！ んあっ……れろっ……じゅるるる……じゅる……くちゃ」

(ミカサの唾液っ！！ どんどん溢れてくるっ！！ うますぎるっ！！)

ミカサの唾液がどんどん自分の中に入ってくることにより、興奮は高まっていき、脳は痺れ、目が血走ってくる男。

さらにはミカサの口内を完全に犯さんばかりにベロで口内全体を力強く舐めていく。

「れろっ……えろっ……んあっ……」

口内を男の舌が好き放題力強く舐め尽くすことによって、キスをしているミカサの頬が内側から蠢きだし、完全に口内を犯されてしまう。

今やミカサの口内は男の唾液と交わり、お互いの口内の匂いも混ざり合ってしまった。

「んっ……ぶあっ！！ はあ……はあ……もういいでしょ、いつまで続けてるの？」

さすがにたまらなくなったミカサは何とか男から顔を離してディープキスから脱出する。

不快感と嫌悪感と疑惑の念が混ざり合った視線を男に飛ばしているが、ほんの少しだけ

頬の赤くなっているミカサ。

(あれ……ミカサ……もしかして……いやいや、まだまだ油断は禁物だ！)

絶対にミカサとセックスしたい男はいくらミカサに少し変化が訪れても慎重にいく。

「ごめん。でもこの治療は第一に興奮することが重要なんだ」

「興奮？ そもそもどうなったらあなたの病気は完治するの？」

度重なる男の不審な言動に違和感を感じていたミカサが、侮蔑の表情で当然の質問を投げかけてくる。

「ミカサを見てもチンポが興奮しなくなったら完治なんだ」

「どうすれば興奮しなくなるの？」

「精液を全部ミカサが搾り取ってくれればいいんだよ。そうすればチンポも立たなくなる。唾液や汗の摂取は痛み止めの効果があるし、それに興奮もして射精を早く促してくれるから、唾液の交換はどうしても必要なことなんだ。今のところミカサの唾液が一番の痛み止めだからね」

男は適当なことを言って性知識の乏しいミカサを何とか言いくるめようとする。

「……こんなことを」

男に抱きしめられながら、歯ぎしりをして眉間に皺を寄せ下を向きながら考え込むミカサ。

ミカサが不快な表情をしているにも関わらず、男にがっちりと抱きしめられ、勃起チンポを太腿に挟み込んでいるという背徳感のある状況にさらに興奮した男の肉棒は、膣内射精をしたようにさらに反り立ちながらズボン越しのミカサの秘部に押し当たり、硬さを増していく。

「ほら、ミカサ、分かるだろ。ミカサを抱きしめてるだけでこんなに興奮してチンポが硬くなってるんだ。頼むよミカサ。痛くてしょうがないんだ。完治するまで手伝って欲しいんだ、ミカサじゃないとダメなんだよ」

そういいながら男は腰を振り、ミカサの股間に自分の愚息を擦りつける。

「……………わかった。完治までは手伝う。でも、治ったら二度と私に近寄らないで」

男を睨みつけながらキリッとした表情でそう告げるミカサ。

「ありがとうミカサ。助かるよ」

(よしっ！！！！　ここまで言わせればあとはゆっくりラブラブセックスまで持って行ってやるからなっ！！！！　絶対モノにしてやるぞこの筋肉汗臭美人)

ミカサにチンポの世話を取り付けたことがうれしく顔がほころびそうになるのをぐっところえる男。

「じゃあ今日は最後にベッドで。ああ、もちろん唾液交換しながら行くぞ」

「くっ……わかった。んちゅ……んっ……くちゅ……ちゅる……」

男はミカサを抱きしめて再びディープキスを始める。

今度は少し積極的にペ口を絡めに行くミカサ。

そしてゆっくりと二人はペ口チューしながらベットへ移動して、男が優しくミカサを寝かせる。

二人の姿はまるで早くセックスしたくて部屋に入ってきた時から我慢できずにペ口チューを始めてしまい、ゆっくりとベットに向かう恋人同士のような姿だった。

「んちゅ……んっ……じゅるっ……んあっ……ありがとうミカサ。だいぶ落ち着いてきたよ。そろそろ汗も摂取した方がいいから、腹筋舐めさせてもらってもいいか？」

「んっ……勝手にして」

まだ不快感の残る顔で横を向きながら返答するミカサ。

了承を得た男はゆっくりとミカサのシャツのボタンをはずしていき、綺麗に割れた見事な腹筋が露になる。

(うっわっ、なんだこの筋肉っ！！！！　こんなかわいい顔しといてばこんなバキバキの腹筋してるとかつ！！　超興奮するっ！！！！！！！！)

見事に割れて無駄な肉が一切ない筋肉腹筋。

ミカサの端正な顔立ちからは想像もできぬほどの筋肉の塊がそこにはあった。

男は興奮のあまりミカサの汗くさ腹筋に顔を近づける。

「はぁ……はぁ……綺麗だ……ミカサ……」

「そういうのはいいから……早く済ませて……」

少し恥ずかしそうにしながら顔を背けて、男に早く済ませるように促すミカサ。

興奮した男はミカサの腰に腕を回して、身体を抱き寄せ腹筋に思いっきり頬ずりする。

「んっ!？」

「んんんんんっ～……はぁ……めちゃくちゃ硬くて……いい匂いだよミカサ……」

すりすり腹筋に頬ずりをして匂いと感触を楽しむ男。

不可解な男の行動には不快感があるが、腹筋をほめられたことによりミカサの感情が少しずつだが崩れていく。

「……こんなことして……なにが……」

「ミカサの筋肉は魅力的過ぎるんだよ！ だから興奮しちゃって、チンポも硬くなるんだ。れっろっ！！ じゅるっ！！」

「ふぁあっ！！ んっ……」

急に男が腹筋を舐めたことによりミカサから驚きの艶めかしい声が漏れてしまう。

「れっろ……じゅるっ……れろっ……れろっ……んちゅ」

見事に割れている腹筋の中央の筋を舐めていき、微かに残った筋肉汗をうまそうに摂取する男。

「んっ……くう……くっ……んっく……」

腹筋など舐められたことのないミカサにとって、未知の刺激が襲い掛かってきたことにより、感じないように我慢しているが声が漏れてしまっている。

「れろっ……れっろっ……じゅるっ……じゅるるるる……」

(腹筋舐められて喘ぐとかエロ過ぎだろっ！！ 汗の味もしょっぱくてうまいっ！！ ていうか腹筋硬すぎっ！！)

割れている腹筋の筋を舐めて汗を吸いだしながら、腹筋全体も舌をおもいっきり出して舐めまくる男。

「んっ……くぁっ……ふっ……んっ」

舐められていることにより、感じることを我慢し力んでいるためミカサの身体はプルプルと小刻みに震える。

その反応すらも男の興奮を増す材料となり、肉棒はどんどんと精液を吐き出す為にはれ上がっていく。

「れっろっ……れろっ……れろっ……れろっ……」

ミカサの反応を見て興奮が高ぶった男は、ミカサのへそに舌先を入れてほじくり回す。

「んっ……んあっ……くあっ……そんなとこっ……」

未知の刺激に頭の処理が追い付かずに震えながら喘ぎ声を漏らすミカサ。

「れろっ……大丈夫だよミカサ。れろっ……ちゃんとへそ汗もおいしいから……れろっ」

「くっ……」

男の発言に不快な表情になるミカサだが、腹の舐め廻されている官能的刺激の方が勝ってしまい、顔を赤らめ感じるのを我慢しているようにしか見えない。

調子に乗った男はへその下の膣口に近い下腹部分を舐め始める。

「れろっ……れろっ……じゅるるるるるるっ……ちゅうううううう」

「くあああっ！！！ そんなとこっ……んあっ！！？」

膣口に届きそうな敏感なところまでをベ口で執拗に舐めまわし、さらには吸い付き味わい尽くす。

触れられるだけでも反応しそうな敏感な下腹部が、男のベ口で犯されてしまい妙な刺激で大きな声を出してしまったミカサ。

先ほどからの官能的に漏れる喘ぎ声と、腹筋の汗の味に男の興奮もピークに達する。

(やばっ！！！ もう無理だっ！！！ ミカサエ口過ぎるっ！！！)

「んっ……ぶあっ！！」

男は腹筋を舐めるのをやめてミカサの頭に右腕を回してがっちりつかみ、逃がさないようにディープキスをする。

「んっ！！！！！」

無断で口内に侵入してきたベ口に驚くミカサ。

男はさらに左手をミカサの右手と恋人繋ぎをしてがっちり掴む。

そして破裂しそうなくらいパンパンに膨れ上がった肉棒をミカサの腹筋にあてがって、腰を動かしながら腹筋ズリを始める。

「んちゅっ……くちゅ……くちゃ……じゅるっ……はあ……ミカサ……くちゃ……可愛すぎるっ……くちゅ……可愛いぞミカサ……くちゅう……」

「んっ！？ んあっ……れろっ……んっ……くちゃ」

男の突然の誉め言葉に少し顔の赤みが増すミカサだが、自分の腹筋がこのように使われている怒りが勝って腹に力が入る。

「んんんんんんんんんっ！！！！！！」

腹に感じるマグマのような熱さに、ミカサの身体は小刻みに震えてしまう。

「んっ……ぶあっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

「んっ……ふうあっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

男は腰が抜けそうになり、震えながら左側に倒れる。

「んっ……これで……今日は終わり……」

三度目の射精が終わり、立ち上がりそうになったミカサを男は止める。

「ちょっとまってミカサ。精液には筋力を増幅させる作用もあるんだ。だからしっかり塗っておいた方がいいよ」

そう言ってミカサの腹筋を見てみると、白濁液がべっとりとマーキングするかのようについており、さらには腹筋コキで抜け落ちた男の陰毛も何本か付いていて、完全に犯された腹筋がそこにはあった。

「ごくっ……」

自分の精液と陰毛でべちょべちょになっている鋼の腹筋に下っ腹が熱くなりまたもや男は興奮してくる。

「ほらミカサ、こうやって腹筋に精液を塗ることによって筋肉がどんどんほぐれていくんだ」

男は右手でゆっくりとミカサの腹を撫でまわして、自身の精液を刷り込んでいく。

まるで自分の所有物かのようにマーキングされていくミカサの腹筋。

「んっ……そう」

男がすることに不快感はあるのだが、身体の気怠さが勝ってしまい素直に受け入れてしまうミカサ。

「そうそう。明日も効率よく射精するために今から準備しておかなくちゃね。んちゅっ…
…くちゅ……じゅるっ」

男は左手でミカサに腕枕する形を取り頭を寄せて再びキスを始める。

鍛え上げた肉体に精液を刷り込まれながらミカサはディープキスを受け入れる。

「んっちゅ……ちゅるっ……くちゅ……ちゅ……」

半ば諦めるような形で男の舌を受け入れて、弱い弱しいが男のベ口の動きに合わせて自

分の舌を絡めるミカサ。

今日の分の手伝いは終わったにもかかわらず、二人は気怠さに身を任せながらしばらくの間ディープキスを続けていた。

2

次の日。

空き部屋には男がおり、ミカサが来るのを今か今かとチンポを半勃起させながら待っていた。

ガチャッ、という音と共に扉が開かれ無表情のミカサが入ってくる。

「……ゴクツ、待ってたよミカサ。今日もかなり痛くて、手伝ってくれるよな？」

「……………」

ミカサは無言で男の股間に目をやる。

その目は本当に痛みを発しているのかどうか、疑いを持っている眼差しだ。

実際男が言っていることはミカサとエロイことをするための嘘なのだが、愚息が痛いというのは本当だった。

昨夜、淫猥な性治療をミカサで行ったことにより、男の性欲はさらに増してしまい、今日はミカサを見ただけで勃起してしまうくらいチンポが暴走してしまっている。

「ほら、ミカサ、これ」

男はズボンを脱いで下半身を丸出しにした状態になる。

ミカサが今日も空き部屋に来てくれたという事実で、ミカサを見た瞬間から半勃起状態から完全勃起状態になり陰茎は点を見上げて苦しそうに膨れ上がっている。

「ミカサを見ただけでこんなに腫れて、痛いんだ」

ミカサは顔を歪めて眉間に皺を寄せて不快な顔になる。

だがどんなにチンポを睨んだからといって実際に痛いのか痛くないのかはミカサにはわからない。

どちらかというとかなり痛そうな見た目をしている。

昨日の終わり、男からはデリケートな問題だから他の人には内緒にしてほしいと言われたため相談することもできない。

なにより半ば強制的とはいえ、自分の口から手伝うことを了承してしまっているミカサ。

ミカサは目を閉じて深呼吸をし、意を決して発言する。

「……………今日は何をすればいいの？」

「ありがとうミカサ！！ 助かるよ！！」

ミカサはまだ不快感が全然取れていないようだったので心配していた男は、協力してくれる発言に一気に下半身が熱くなり、興奮が増してくる。

「じゃあ、とりあえず唾液の交換……これからはキスっていうことにしようか。いやっ、別にホントにキスしてるってわけじゃないけど、似てるしさっ、ほら、唾液の交換とか人工呼吸って長いし……ね？」

「……………わかった……でも……キスじゃないから」

薄暗い瞳がジト目になりながらもキスという言葉をもミカサは認める。

そして二人は近づいて、男はがっちりとミカサの首に両腕を回して抱き着く。

(うわ～、ミカサの匂い……めちゃくちゃいい匂いだあ～。少し汗のにおいも混じってて。髪もサラサラだ)

ミカサの匂いを堪能しながら男は右手で後頭部を撫で髪の感触を楽しむ。

「んっ……」

少し不快な眉の動きをしたミカサだが、男の行動を素直に受け入れている。

「そうだ。それから今日はチンポに慣れてほしいんだよ」

「慣れる？」

ミカサはそれを聞いて、不快感と戸惑いが合わさった表情になり男に聞き返した。

「うん。チンポを触ったりして、チンポ自体に慣れて行って欲しいんだよ。ほら治療にはやっぱり、ミカサに触ってもらった方がいいからさ」

「……」

ミカサがチンポを見るため下を見ようとしたので、男は左腕を動かしてミカサにチンポ

が見えるように身体を傾ける。

ミカサが見てくれたことに反応するかのようにピク付いた陰茎が、触ってほしそうにミカサの顔面に亀頭を向けている。

「ほら、まず触ってみてくれる？」

「……………んっ」

そういわれたミカサは恐る恐る右手を順手に、チンポ全体を包み込むように触る。

「んっ！」

男は初めて他人の、しかも極上の美女の柔らかい右手が勃起チンポを触った感触のあまりの気持ちよさに声が漏れてしまう。

「んっ……熱い……硬いけど……グニグニしてる……痛そう」

生まれて初めて触った男の陰茎、しかも完全勃起状態のため痛みを感じていそうな感覚を覚えるのも無理はない。

少しだが、ミカサの表情が緩み心配そうな眼差しをチンポに向ける。

「そう、めちゃくちゃ痛いんだ。だから早く精子をいっぱい出して、発散させないといけないんだ」

「精子……あの白くて熱い……」

ミカサは軽くチンポを摩りながら精液という単語を聞いて、昨日自分の腹筋に受けたドロドロで高熱の白濁液の感触を思い出す。

「そう、それで精子を射精するためにはチンポを興奮させなくちゃダメなんだ……だから……今日は……ゴクツ」

男はそこで意を決して、ミカサのズボン越しの股間の秘部の部分に手をやって軽く撫でるように触る。

「っ！？ つなにををするのっ！？」

自身の秘部に触れられ驚いたミカサが男を振り払い後ろに離れた。

ミカサの行動に動揺した男がおろおろしながら弁明を始める。

「あっ、ああ……ごめんミカサ。でも治療には必要なことでっ、そのっ、そう、ミカサのそこを弄って出てくる分泌液を摂取すれば、より興奮が高まって射精が早まるんだよ。完治するためにも絶対に飲んでおいた方がいい分泌液なんだ」

先ほどまで肥大したペニスを心配するような表情が一変して、眉間には谷ができ、口を噛みしめ明らかに敵意を向けるような表情になるミカサ。

「分泌液？ ここから出るのは尿でしょ。それを飲むの？」

「もちろん尿も飲むよ！ でも他にもそこから出るんだよ。その分泌液を飲まなきゃ根本は治らないんだよ」

ギリギリと憎しみを込めた表情で男を睨みつけているミカサだが、性知識が乏しいため、真実を言っているのか嘘を言っているのかの判断ができずに迷いが生じている。

「他の液なんて出るわけないっ！」

「じゃあ試してみようよ、お互いにキスしながら触り合えばおのずと出てくると思うから……愛液が」

「愛液？ それが出てくるの？」

男はそのミカサの問いに思いっきり首を縦に振ってこたえる。

少しの間、室内に沈黙が訪れる。

下半身裸で勃起を晒した状態の男が緊張した面持ちでミカサを見つめ、片やミカサは苦悩に満ちた表情で考えている。

「ふう……」

一旦ミカサは深呼吸をして、

「わかった。そんな液でないと思うけど試してみる」

冷淡な表情で男を見据えて愛撫を了承する。

「……ゴクッ……よし、じゃあ、お互いに濡れると思うから、ミカサは下着姿になったほうがいいと思うよ」

「下着に？ なぜ？」

「ほらっ、昨日もチンポから精液が飛び散っただろ？ あんな感じでさ、今日はどこに飛び散るか分からないから、なるべく濡れてもいい格好をしといたほうがいいと思って」

「……わかった」

昨夜のべとべとの精液が頭を過り、洋服に着いたら面倒くさいことになることは考え付いたミカサは素直に下着姿になる。

スルッ、スルッ

男の前で服を脱ぎ始め。見事な肉体美の下着姿が露になった。

(おお……これがミカサの身体……筋肉やっぱすげえな……だけど……めちゃくちゃ工口い)

グレーのスポーツタイプの下着を着ており、見えている肌は筋肉質なのがうかがえるほどの肉体美。

だがミカサの端正な顔とのギャップも相まって、男にはその筋肉質な身体が卑猥に思えて、興奮でふつつつと睾丸の中が煮えたぎってくる。

ミカサも下着姿を男に見られるのは抵抗があるのか、少し頬が赤くなっている。

「綺麗だ……ミカサ……めちゃくちゃ……」

「んっ……そういうのはいいから……さっさと終わらせて」

少し顔の火照りが濃くなったのは気のせいかな、表情を悟られないようにして下を向いたミカサ。

男は全裸になり、ミカサに近づいた。

(意外とおっぱい大きいよな。くっそー抱き着きてー、ブラの上からでもいいからかぶりつけてえな。ていうかスポーツ下着工口っ！！ これもう筋肉汗くさドスケベ女だろっ！！)

意外と肉付きの良い胸を見て邪な考えを膨らませる男だが、ミカサに怪しまれないように慎重にことを進める。

「で、どうするの？」

「ああ、ミカサはチンポを扱ってくれるか？」

「扱く？」

「そう、まずさっきみたいに握ってもらっていいか？」

不信感のある顔をしながらも、ミカサは素直に先ほどと同じように男の愚息を右手を順手にして握る。

再びミカサの温かくきめ細やかな掌が凶悪な肉棒を鎮めるかのように包み込み、男は幸福感で脳が痺れた。

「くっ……そう、そしてこうやって……」

男は自分の手をミカサの手を包み込むような形で握り、自慰行為をして見せる。

(ミカサの手……やわらけえ～)

「こんな感じで、上下に動かしていけば、そのうち射精するんだ」

「んっ……わかった」

ミカサは男の言われたとおりにチンポを扱くために握った手を動かし始める。

遠慮がありぎこちない動きだが、憧れのミカサが下着姿で自分のチンポを扱いているという事実があまりに性的興奮を刺激してすぐさま射精しそうになるくらい肉棒はバキバキなる。

(やばっ……もう射精そう……でも……我慢だっ！！)

男は射精の衝動を必死に我慢する。

ここで果ててはミカサのマンコを弄ることができない。

「じゃあ、こっちも、愛液を摂取しなきゃいけないから、触っていいよな？」

先ほどの了承を得たとはいえ、男は恐る恐るミカサに尋ねた。

「そんな液でないから。いい、早くやって」

愛液の存在を否定し、男を睨みつけ、半ばやけくそ気味に怒気を含みながら承諾するミカサ。

「じゃあ、いくぞ……」

男の右手がミカサのグレーの下着の中へ侵入する。

「っ！？」

中に手を入れられると思っていなかったミカサが、一瞬驚き、すさまじい殺気を出したが、何とか堪えて男の侵入を許す。

愛液の存在を否定している手前、男の行動をいちいち拒んでいられないミカサは、たとえマンコを刺激されても分泌液などでないと信じている。

(これが……ミカサの……)

男はまず、ミカサのまだ誰の侵入も許したことの無い陰口を優しく撫で始める。

パンツの中を男の手が侵食し、蠢き変形するその外観がたまらなく工口く卑猥に見えてしまい、男の興奮はどんどん高まっていく。

「んっ……くっ……」

汗でムレムレの股下は既にじっとりと湿っており、グレーのパンツにうっすらとシミができています。

(たぶんまだ……触られてる不快感だよな)

ミカサの声が漏れているが、恐らく感じているわけではないと思った男は慎重に膣口を優しく撫でまわしていく。

生暖かいパンツ内とぶにぶにした触感のヒダが掌に擦れ、男にマンコを触っていることを実感させる。

「んっ……んっ!？」

初めて秘部を他人に触られている感触に不快感と、感じたことのない脳への刺激が交わり、声を漏らしてしまうミカサ。

自身が感じる変な感覚に抵抗するかのようになり、ミカサの男の肉棒を扱く手が強まる。

「うお!! くあっ!!」

(やばいっ! これっ!! 手コキ気持ちよすぎてっ!! 持たない!)

ミカサに扱かれている肉棒の亀頭からは既に我慢汁が大量にあふれており、射精も秒読みというところまで来ている。

なんとかそれを堪えながら男は、一旦ミカサのパンツから手を出し、人差し指と中指を愚息の亀頭にあてがって我慢汁を指に付ける。

(濡れてないなら潤滑油として、我慢汁を使えばっ!!)

自分のチンポから出た汁をミカサの膣内に入れるということを考えただけで、興奮が増して肉棒は硬さを増して、下っ腹が熱くなる。

「ミカサっ! キスするぞっ!」

「キスじゃないっ!!! っ!? れろっ……んちゅっ……じゅるっ」

少しでもミカサが感じる足しになればいいという思いと、ただ単にミカサとキスしたいという思いもあり、男はミカサの口内に舌を侵入させる。

そして男は再びミカサのパンツ内に手を伸ばして、膣口に手をあてがう。

先ほどまでは汗で蒸れていたとはいえ、十分な水分がなかった陰口に我慢汁でべとべとの指が侵入してくる。

(これなら何とか……ミカサも感じてほしいからな)

「んちゅっ……じゅる……れろっ……じゅるるる」

ミカサの口内を犯しながら、男はゆっくりと人差し指で膣口に入れるか入れない程度のソフトな触り方で、ヒダを擦る。

「んっ!!!??? んちゅっ……んっ……ぶあっ……んちゅ」

ミカサは未知の感覚に襲われ驚くが、男の左手にがっちりした後頭部を抑えられ、ディープキスから逃げ出すことができない。

男はミカサの膣口を摩りながら少し指を挿入してみる。

にゅるっ、とした感触で人差し指の第一関節までが、我慢汁という潤滑油のおかげで抵抗なく入る。

「んあっ!!!?? じゅるっ……べろっ……れろっ……」

ミカサが表情を歪ませて、膣口へ侵入してきた指の感触をマンコで感じ取る。

今まで感じたことのない脳への刺激に抵抗するかのようになり、腰を引いてしまうミカサだが、男はそれを逃がさない。

がっちりした後頭部を掴みディープキスを続ける。

マンコを弄られているせいでミカサの肉棒を弄る手の動きが少し弱まる。

男はこれ幸いと人差し指を膣内で少しずつ動かし始める。

指を回しながら膣壁をなぞるように触っていくと、ヒクヒクと膣内が蠢き、男の指の侵入を喜んでいるようだった。

(これなら……いけるな……)

我慢汁で湿った膣内を弄ることによって、わずかだがマンコから分泌液が出てきた。

「んじゅるっ……んっ……ぢゅるるる……んあっ……れろっ」

ミカサの口内を犯すべ口の動きを強め、上からも脳に刺激を与えることによって、膣内の濡れを増そうとさせる。

力の逃げ場がないミカサは頬を火照らせながら感じるのを我慢するような表情でキスをしている。

男はそんなミカサにスパートをかけるために、思い切って我慢汁で濡れている指を二本入れようと、膣口にあてがうと……

ズボッ

「んっ!？」

「んんんんんんんんんんっ!!!! んあっ!!!!??？」

まるで男の指が入ってくるのを待っていたかのように、一気に二本の指とも根元まで膣口が吸い込んだ。

この出来事に二人とも驚く。

(うわっ!! 指二本とも吸い込まれたっ!! 膣口過ぎだろっ!! 筋肉マンココまでやべえのか!!!)

根元まで飲み込まれた指を抜こうとしても、抵抗があり膣壁の肉壁がうねうねと絡まってきた、男の指と我慢汁を捕食する。

男は我慢汁をたっぷり飲ませてやるため、潤ってきたミカサの膣内を少し力強く弄りだす。

全体的にまんべんなく膣内の肉壁に指先をひっかけるようにして強めに弄っていく。

「んんんんっ!!! んゝああああああ!!! んじゆるっ!!!」

感じたことのない、性の刺激が何度も一気に脳を襲ってきて、たまらなくなったミカサは快感から逃れようと腰をくねらせガニ股に足を開いて後退しようとする。

だが逃げられるはずもなく男にがちりつかまれ、口内も犯されまくる。

「んじゆるっ! くちゅっ……んあっ……れろっ……じゆるっ」

「んんあっ!! んぶっ! んっ……あっ!! あっぶっ! じゆるっ!」

ここでミカサは本能的に、男が射精すればこの未知の刺激から逃れられると思い、先ほどまで緩めていた肉棒を扱く手の動きを一気に強めて、射精に掛かる。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、

男もミカサの刺激に対抗するように膣内を二本の指で力強く手マンしていく。

ぐちゃっ、ぐちゃ、ぐちゃっ、ぐっちゃ

すでにミカサの膣内からは分泌液が漏れ出てきており、どろどろグレーのパンツのシミを濃くしていつている。

男は指をさらに奥深くに入れながらミカサの膣内を指で犯していく。

今やトロトロになっているミカサの膣内。

キスじゃないと言いながら、男とディープキスをして、手マンをされ膣内から愛液を漏らし、右手は男の肉棒を必死に扱っている。

傍から見ればこの姿はラブラブカップルが変態プレイに勤しんでいるようにしか見えない。

二人の股間部から漏れてぐちゃぐちゃとした淫音が室内を支配して、二人の耳にももちろん聞こえてきて、耳からも脳を犯してく。

ディープキスは、もはや獣同士が行っていると思われるくらい激しく、時折お互いの歯が当たりながら、力強く舌を貪り合っている。

「んじゅるっ……じゅるっ！！ んあっ！！」

「んぢゅるっ！！！！ んっ！！ ぷあっ！！ んんんんっ！！！！」

ミカサは快感から逃れようとする力が逆にキスと男の肉棒を扱く手の力が強まり、快感を促しているようにしか見えなくなっている。

おまけに左手は弱弱しくも男の肩を掴んでいるのが、さらに肉棒に興奮を与えている。

(ミカサっ！！ ミカサっ！！ イケっ！！！！ 絶頂しろっ！！！！)

ぐちゅっ！ ぐちゃ！！ ぐちゃ！！ ぐちゃ！！

ラストパートをかけるように、男の指がミカサの膣内を犯しにかかる。

それに喜ぶように膣内は反応し、肉壁をうねらせながら指を包み込み、愛液を漏らしていく。

ガ二股のミカサの内ももに溢れた愛液がどんどん垂れていく。

ガ二股の足は痙攣しながらも必死に絶頂に耐えていた。

「んっじゅるっ！！！！ んあっ！！！！ あああっ！！！！」

眼を潤ませて、必死に快感にあらがいながら、男を射精させるため、右手を力強く動かすミカサ。

さすがの肉棒もあまりの幸福感と快感に耐えられなくなり、竿の内部からどどんとマグマのような熱さの白濁液がせりあがってくる。

(二人でイクぞっ！！！！ 絶対同時イキだっ！！！！)

射精寸前のペニスを感じ取り、男も手マンの力を強める。

そして、

こいディープキスをしていた。

男の下半身が下になりミカサがその上に座っている。

さきほどミカサの股間から漏れた愛液が男の太腿にも伝ってきて、ぬるっとした感触を与えている。

その愛液を物欲しそうにしながら勃起した肉棒が、ミカサの秘部に触れてグレーのスーツパンツに押し付けられ、擦れ我慢汁を出してはミカサの愛液と混ざり合い、さらにパンツのシミを増やしていく。

「んっ……んあっ……れろっ……んあっ……んんっ」

男はミカサの腰に両腕を力強く回し、完全に肉体をくっつけた密着状態でキスしている。

程よく大きいミカサの胸が男の胸板に押しつぶされて卑猥な形に変形している。

その胸の感触も男を興奮させる要素となり、愚息はますます硬さを増し、ミカサの秘部に刺激を少しずつ与えている。

「んっ！？ んっ……あっ……れろっ……んぷっ……じゅるっ」

肉棒が自身の膣口をパンツ越しとはいえ、擦りつけられ刺激されていることの未知の感触に、顔を歪めるミカサ。

ミカサは相変わらず両腕はだらんとしたままで、決して男に抱き着こうとはしないが、キスは受け入れており、男の舌の動きに合わせて弱弱しいが自分の舌を絡めていきながら唾液交換をしている。

ミカサとの抱き着き密着ベロチュウに、先程一回射精したにもかかわらず、男の肉棒は破裂しそうなくらい膨れ上がってきた。

(やばっ！ これ……もう……射精そうだっ！)

「んっ……ぶはっ……ありがとうミカサ……キス……ホントに助かるよ……れろっ……れろっ」

そういいながら男はミカサの顔を舐めまわす。

「んっ……キスじゃないから……」

ミカサは顔を歪めながら否定するが傍から見たらどう考えても恋人同士のキスをミカサ自身も受け入れている。

男はミカサをベットに座らせたまま立ち上がり、勃起し、いきり立ったペニスを見せつけるようにミカサの顔面の前に持っていく。

「んっ……」

明らかに不快な顔になったミカサ。

だが、先程の絶頂で潤んだ瞳と上気した頬により、完全なセックス顔になっているため、不快な顔も男の興奮剤にしかない。

(ミカサの整った綺麗な顔に……完全勃起したチンポが……)

「ごくっ……」

眉間に皺が寄り不快な表情をしているが、そもそもが端正な顔立ちをしているため、起こった表情さえも興奮のスパイスになり、さらにそこに勃起チンポがあるという考えられなかった状態に脳が痺れてしまう男。

そして男は両手でミカサの頭を優しく抑えて、ゆっくりとまずはミカサの左頬に勃起した愚息を這わせだした。

亀頭の裏側から、竿の裏筋、そしてブニブニとした睾丸がゆっくりミカサの頬を張っていく。

「くっ……」

あまりの不快な感触に目を細め、歯を食いしばり不快感を我慢するミカサ。

「これはなにをしているの？」

「これから治療のために、ミカサにチンポに慣れてもらおうと思って……どうかな臭いとか？ 興奮する？」

上気した蒸れ蒸れ勃起チンポが容赦なくミカサの顔を犯していく。

「興奮？ こんなことで……興奮……なんて……するわけない」

不快な顔をしているミカサの顔に徐々にチンポを這いずらせる男。

不快な表情をし否定的な言葉を発しているミカサの眉間に、ずっしりとした精子がパンパンに溜まった睾丸を乗せる。

薄目を開けて目の前にある金玉を睨みつけるミカサ。

ミカサの顔面に思いっきり自分の睾丸を乗せることにより、支配欲と征服欲はどんどん膨れ上がって行って、男の睾丸を押し付ける力も強くなる。

「くっ……」

男は次に、両鼻の穴を塞ぐようにそこに金玉を持っていく。

ブニブニした感触と目の前に亀頭がきたこと、さらには生臭い蒸れたチンポの匂いにミカサの不快感はどんどん増していく。

(ミカサの綺麗な顔にチンポが……くうーたまんねえ!!!)

鼻に覆いかぶさるように金玉が置かれている下品な状況が少し滑稽だが、その様さえも脳を刺激し、肉竿は硬さを増していく一方だ。

「チンポの臭いとかさ、嗅いたら……さっきみたいに股間が濡れてきたりとかしない？」

愛液のことを聞かれてミカサは瞬時に不愉快そうな顔になり反論する。

「さっきのは、あなたが変なことをしたから……そう……驚いて失禁しただけ」

(失禁っ!? それはそれで興奮する)

ミカサの口から失禁という言葉が出たことと、股間から尿を出したことを認める発言に興奮が増す。

興奮した男は身体を動かして、ミカサの左側からチンポの竿の部分の部分を鼻の穴に擦りつけて、生臭い匂いを直接嗅がせるために腰を動かす。

「うっ……くっ……」

恐らく匂いを嗅がないように、目を細め、眉間に皺を寄せながら息を止めて我慢しようとするミカサ。

「そうか、失禁か……ミカサ、この治療に一番効く方法はね……セックスすることなんだよ」

「セックス……それは……」

ミカサが男を見つめて疑問の顔になる。

「それは……子供を作るためにすることですよ。あなたとすることじゃない」

(今やってるこれもセックスみたいなもんなのに……)

ミカサの言っていることと、鼻にチンポを擦りつけられている行為が性的ギャップを生み、男の黒い欲望がふつつつと煮えたぎってくる。

男はチンポを擦りつける力を強め、より鼻に押し当てながら腰を動かしていく。

「子供を作るときもそうだけど、それ以外でもセックスはしていいことなんだ。こうやって勃起したチンポを鎮めたりするときはセックスすることが一番なんだよ」

「くうっ……でも……」

手伝うといった手前断り辛いのと、セックスはやはりしたくないという思いがミカサの頭を巡っている。

それと同時に、少しずつだがチンポの生臭い匂いが鼻の中に入れてきて鼻腔にこべり付き、無意識のうちに少しずつ判断を鈍らせていた。

「セックスはお互いに気持ちよくなることなんだ。さっきは失敗しちゃったみたいだけど、ミカサの股間を弄ることによってホントは愛液が出てきて段々気持ちよくなって、セックスがしたいって思うようになるんだ」

「そんなわけ……ない」

必死にチンポの臭いが入ってこないように我慢しながら、否定的な意見をやるミカサ。

「無理やりセックスするのは良くないから、もしミカサがセックスしてもいいなら言ってくれる？ その方が治療も早く終わると思うし、完治しやすいから」

男の興奮が増していき、鈴口から我慢汁が漏れ出してくる。

ぬちよっ……ねちよ……ねちよ……くちよ……

ミカサの鼻のした我慢汁によってテカリだし、さらには匂いもきつくなりミカサの鼻腔をチンポ臭が刺激する。

「くっ……うっ……わかった……そんなことにはならないと思うけど……必要になったら……セックスする。でも……基本的には……他の方法で治療する……」

「っ！？」

この状況を早く終わらせたいという思いが強いのか、ミカサはセックスすることを了承してしまう。

半ば強引とは言えセックスの了承を得た男は興奮が増して、

「ありがとうミカサっ！！！！」

鼻の下を擦っていたチンポを唇に持って行って、唇口キをする。

くちゅっ！ くちゅっ！ くちゅ！！ くちゅ！！ くちゅ！！

「んんんっ！！！！？？？」

ミカサは驚き眼を見開くが、何とか口を閉じてチンポの口内への侵入を塞ぐことに成功する。

気持ちの悪い感触が口にくることで、唇を口の奥へ持っていくミカサだが、

「んっ！！ んっ！！」

口を塞ぐことによって鼻で呼吸をしないといけなくなるため、ダイレクトにチンポ臭が鼻から入ってきて脳を刺激する。

「んっ！！ んあっ！ ぶあっ！！ んっ！！」

くちゅ！ くちゅあ！ くちゃ！ くちゅ！

男はミカサの口内に我慢汁が入る様に、亀頭を勢いよく押し付けながら腰を押し込み、唇の間に尿道海綿体を這わせるように唇口キを力強くする。

「はあっ……はっ……くう！！」

(ミカサの唇！！ プリっとして、綺麗な唇に！！！！ チンポが！！)

時折チンポの臭いを嗅がないように、口が開きかけると、プリプリの唇が竿の裏を気持ちよく刺激して射精を促す。

「んっ！ んあっ！ んぶっ！！ んんんっ！！！！」

不快感とチンポの臭いと唇のチンポの感触を我慢しながら顔を歪ませるミカサ。

そんなミカサを見下ろし、征服欲と支配欲が刺激されて男の射精欲を刺激した。

くちゅ！ くちゃ！ くちゅ！ くちゃ！

我慢汁でミカサの唇はテカリ、唇の弾力感を先走り汁によるぬるぬる感が極上の快感をチンポに与える。

「んっ！ んあっ！！ んぶっ！！ んあっ！！」

「はあ！ はあ！！ ミカサっ！！ ミカサっ！！！！」

腰の動きはより激しくなり男の睾丸から精子が放りあがってくる。

その睾丸は男が腰を打ち付けるたびにミカサの左頬にあたり、跳ね返っているところが卑猥なのだが、ミカサには不快な感触を与えていた。

ミカサの顔にチンポを擦りつけ、チンポの臭いを嗅がせただけでも射精ものの興奮を味わった男がそこまで我慢できるはずもなく。

「くあっ！！！！ ミカサっ！！！！」

より力強くふさがっている唇にチンポを擦りつけるて射精を促し、

「んんっ！！ んっ！！ んんんんっ！！」

射精する寸前、男は両手でミカサの頭を支えて、チンポを顔の正面へ持っていき、

「くあああつ！！！！」

「んっ！！！！！！」

ドピユううウウウウ！！ ドッピユ！！ ドピユ！！ ドピユ！

思いっきりミカサに顔射して、その美しく端正な顔に自らの欲望が溜まり切った精液を浴びせかける。

「んあつ！！ 熱い！！ うっ……」

「はあ……はあ……」

ミカサの顔が全体的に男の精液でドロドロになり、卑猥な匂いをさせている。

その姿は、普段の凛々しい姿とはかけ離れた淫猥な姿になっており、射精したはずの男の股間をまたもや興奮させた。

「こんな……こと……」

ミカサの表情にまたしても不快感が増して眉間に皺を寄せる。

だが唇は我慢汁でテカっており、ドロドロの精液のせいもあってか、そんな表情は興奮を増す要素にしかない。

男は両手でミカサの頭を愛おしそうに撫でながら、射精の後の幸福感と脱欲間の余韻を堪能していた。

「かわいいよ……ミカサ……」

「これの……なにが……」

疑問と否定を続けながらも、チンポと精液の臭いがどんと鼻の中から脳に侵食していき、ミカサの判断を鈍らせていった。

「ミカサ……精液はタンパク質やビタミンとか貴重な栄養素が入ってるんだ……だから飲んでも大丈夫なんだよ。むしろ飲んだ方がいいんだ」

そう言って男はミカサの顔についている精液を指でミカサの口まで持っていき、舐めとらせようとする。

だがミカサは不快な顔を崩さずに体制を逸らせて、精液から逃げるように顔を背けた。

「別にそんなの飲みたくない」

否定しているが、その顔は精液の温かさと肉棒と精子の臭いを嗅いだ無意識の興奮状態

で頬が赤らんでおり、恥ずかしさを隠している素振りにしか見えない。

その仕草までもが男の興奮を誘い、なんとしてでも精液を飲ませたい衝動に駆られる。

「精液を摂取した異性との唾液の交換が治療に重要なんだよ。これも完治するためだと思って、ね？」

ミカサの頭を左手で優しく撫でながらお願いする男。

男のことを横目でにらみつけながらも、知識のないミカサにとっては男の言っていることが事実になるため、逡巡する。

そして一瞬目を瞑り覚悟を決めたミカサは、正面に向き直り返答と言わんばかりに口を開け受け入れ態勢に入った。

「助かるよミカサ。ありがとう」

実際にうれしさがある男はミカサにお礼を言って、精液が付いた指をミカサの口の中に入れる。

「ミカサ、指、舐めてくれる？」

ミカサは怪しむようにジト目で男を見つめながらも、ゆっくりと口を閉じて精液の付いた指を口内へ受け入れて、舌を動かす。

「んっ……くちゅう……れろっ……んっ……ごくっ」

男の指にべったりと付いていた精液をベ口で舐めとり、のどに流し込む。

ディープキスをしていたせいで、舌の動きは卑猥になっており、まるでチンポを舐めるかのように男の指に舌を絡めさせて精液を味わうミカサ。

(やべっ……指舐めさせるの……意外と興奮する)

端正な顔立ちの口の中に指を突っ込み舐めさせるという背徳的な行為が想像以上に工口くて、再び男の肉棒は硬さを増していく。

「んっ……れろっ……んちゅ……ぶあっ」

舐め終わったミカサは最後に指に吸い付くようにしてから一気に口を開けて指から顔を離した。

「味……どうだった？」

「別に……味なんてしなかった」

怪訝な顔をして答えるミカサ。

男はミカサの口から出てきて唾液でテカっている自身の人差し指を見てさらに興奮して、またミカサの顔に付着している精液を丹念にこそぎ集める。

「ほら、ミカサ、まだ精液残ってるから、ね」

男はミカサの顔についていた乾いていない精液をすべて指で集めて、またミカサの口に近づける。

「んっ……あんっ」

するとミカサはまるで自分から精液を体内に欲しているかのように口を開けて指を加え込んだ。

「んちゅう……ちゆるっ……じゆるっ……れろっ……んっ」

男の指がミカサの吸引力で自然と根元まで飲み込まれて、舌に犯される。

精液を一滴も残さないかのように、男の指に舌が這いずり回る様に絡みつき舐めとられる。

「んっ……んっくっ……ごくっ……ちゆるっ……んっ……」

薄目を開けて男を見つめながら指を舐め続けるミカサ。

少しずつだが自分のいうことに対して純情になってきたミカサが愛おしくなり、男は左手で優しくミカサの頭を撫で続ける。

ミカサも男に頭を撫でられていることを拒否せず受け入れながら指についている精液を舐めとる。

「ごくっ……んっ……れろっ……じゆるっ」

すでに男の指の精液は舐めとられている状態にも関わらず、ミカサは口をすぼめて甘噛みしながら舌先を力強く這わせて男の指を犯している。

(うっわ……えろっ……)

人差し指に神経を集中させて全力でミカサの口内の感触を感じる男。

ミカサの歯で甘噛みされているため多少の痛さはあるがそれも心地いい。

なにより、舌だけではなく口をすぼめて吸っているため、口内のぶにゆぶにゆとした柔らかさが指全体に伝わっており、ちょっとした性的興奮が満たされていく。

「んっ……じゆるっ……れろっ……ぷあっ……んっ……これでいい？」

「あ……ああ……ありがとうミカサ」

途中夢中で指を吸っていたような気がして少し男は戸惑う。

(いやいや、だがまだ油断はできないっ！)

用心深い男はもっとミカサに性的興奮を与えてトロトロにさせようと、ミカサの背後に回り抱きかかえる。

「んっ……この体勢は……なに？」

男はミカサを背後から抱きかかえて、自身の両足をミカサの両足に絡めさせて股を広げた格好にさせる。

股を思いっきり開いて生まれてこの方したことのない格好に、恥ずかしさがあるのか、顔を赤らめ苦悶の表情でそっぽを向いているミカサ。

男はミカサの問いかけに答えるように、右手で見事に鍛え抜かれた腹筋を優しく撫で、股間部分には左手をやって摩り始める。

「さっきも言ったけど、ミカサのここから出る液体がチンポの治療には一番重要なんだ。ミカサが気持ちよくなるとさっきみたいに出てくるはずなんだけど」

「さっきのは何かの間違い。別に気持ちよくなんてなかった」

先程、明らかに絶頂していたにも拘らず顔を歪めさせて強めに否定してくるミカサ。

その反抗的な態度もまた愛くるしく、男はミカサの顔の左側に自身の顔を背後から近づけ頬ずりしだす。

「ほんとに気持ちよくなかった？ ミカサが気持ちよくなってくれるのも治療には重要だからさ」

「んっ……あんな事されて気持ちよくなるわけない」

男が股間を摩っていることに声が漏れるが、性的興奮はないと否定し続けるミカサ。

「じゃあ、ちょっとアプローチを変えるけど、胸……触っていいかな？」

「胸を？ なぜ？」

男の意味の分からない問いかけにミカサの怪訝な表情がより強くなる。

「胸を触れば気持ちよくなってきて股間から愛液が出てくるはずなんだよ。だから胸も試して見たくて。ダメかな？」

男のいうことを多少は素直に聞くようになったからとは言え、異性に見られたことも触られてこともない部位を再びさらけ出さねばならない抵抗感に苦悶の表情になるミカサ。

男の言っていることが信じられず、自分は性的興奮など感じないと思っているため、男にセックスを諦めさせるには嫌とは言えない。

さっきのは何かの間違いだ、胸を触られたからと言って何か感じるはずがないと考えながら、眉間に皺を寄せて自分の胸を見つめて、ミカサは決断する。

「胸なんて触っても何も感じない。やってみればいい」

男の申し出を受け入れる。

その瞬間、男のチンポが嬉しそうにピクツと動いた。

「じゃあ、やってみるね、ミカサ……」

そう言って男はグレーのスポーツブラの下から両手を入れてミカサの程よい大きさの胸を包み込むように触る。

「んっ……」

未知の感覚がミカサを襲い声を漏らしてしまう。

(筋肉はカチカチなのにおっぱいやわらけー)

男はまず優しくミカサの胸を揉んでいく。

手で包み込んで少し肉がはみ出るくらいのおっぱい。

筋肉の硬さに対して、こちらは女性特有の柔らかさは失われておらず、揉み込むごとに張りのある弾力が帰ってくる

「んあっ……くっ……」

やさしく揉む男の手の感触に思わず声が漏れてしまうミカサ。

だが何とかして性的興奮を抑え込むように歯を食いしばり堪えている。

男はそんなミカサの首筋をベ口で舐めながら、胸をもてあそび始める。

揉む力を少し強めていき、胸を掴むように揉みこんでは内側に揉んだり外側に揉みこんだりを繰り返す。

スポーツブラの中で卑猥に男の腕が蠢き、好き勝手されている胸をミカサは悔しそうににらみつけ歯を食いしばっている。

「んっ！！ くあっ！！ こんな……ことっ……んっ！！」

「どうかな？ 気持ちよくなってきたミカサ？ 乳首がちょっと勃ってきたみたいだけ

ど」

実際にミカサの乳首は少し硬くなっており、男の掌にコリコリとした感触を与えてきていた。

「こんなことが……んあっ！！ 気持ちよくなんて……」

身体を少し震わせながら声が漏れている姿は、どう考えても感じているようにしか見えないが、抵抗してくるミカサ。

「じゃあ、これならどうだろう」

と言って男は両乳首を摘まみコリコリと弄び始める。

「んんんっ！！！！ んああっ！！」

敏感な乳首を摘ままれたことによって体をのけ反らせながら感じてしまい、声を漏らしてしまうミカサ。

その表情は顔を赤らめて目に涙を浮かべ、よだれを垂らし歯を食いしばりながら必死に快感にあらがっていた。

男はミカサの身体が離れないようにがっちり両足に力を入れて、両腕にも力を込めて抑え込むようにしてまた乳首を弄り始める。

今度は少し強く摘まみ、乳首を引っ張りながら胸を動かす。

「んんっ！！！！ やめっ！！ んあっ！！」

一気に強烈な刺激が痺れるように脳に走り、悶えてしまうミカサ。

男は責め立てるようにさらに少し力を加えてビンビンに勃起している乳首を摘まむ。

あのミカサの乳首がスポーツブラの上からでも分かるくらい快感に勃起していることに男の興奮も高まり肉棒も熱くなる。

「どうしたのミカサ？ 気持ちよくなってきた？」

「くあっ！！！！ んんんっ！！ 気持ちよくなんかっ！！ ない……はあ……はあ……」

ミカサは荒い息が漏れ始めても反抗的な態度を崩さない。

すでに口からはよだれが流れるように出ており、男はそのよだれを美味しそうに舐めとった。

「れろっ……んあっ……本当に気持ちよくない？ じゃあ、こっちはどうかな……」

そういった男は左手を胸からはなし、再び股間にやってパンツの中に侵入し膣口を触る。

すでに愛液でべとべとになっており、グレーのパンツは沁みだらけになっている秘部。

男は肉ヒダを人差し指と中指で擦る様に素早く触りながらミカサの反応を伺う。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ

「んんっ……んあっ！！　そこは関係な……いつ！！！」

反抗的なことを言ってきたミカサに間髪入れずに男は右手でミカサ右の乳首を強く摘みながら胸を引っ張る。

身体をビクンツと震えさせて頭をのけ反らせ、快感にあらがうミカサ。

「関係なくないよ。気持ちよくなかったこんなに愛液が出るはずないじゃないか。それに……ほら」

男は人差し指と中指を膣内に侵入させる。

にゆるツと歓迎するように膣内は一気に男の二本指を根元まで飲み込み、肉壁をうねらせて指に絡みつき、物欲しそうにおねだりしている。

「ミカサの膣、めちゃくちゃ指のみ込んでしまったよ。気持ちよくなってないとこんなに入らないんだよ」

「そんな……わけないっ……気持ちよくなんて……」

顔は少しとろけ始めているが、まだ歯を食いしばって何とか堪えているミカサ。

そんな態度をほぐして行って最終的にセックスに持ち込みたい男は、ミカサを攻め始める。

「じゃあ……」

膣内に入っている二本の指を激しく動かし始め、左手は両乳房をまんべんなく揉み始める。

ぐちゃっ！　ぐちよ！　びちゃ！　ぎゅちよ！　ぐちよ！！！！

とろけているマンコは二本の指をしっかりと根元まで加え、男の動きに合わせて膣壁をうねらせる。

指をきつく締めあげながら肉が絡みつくのに抵抗するかのようになり、男は膣内を押し広げたり、うねらせたりした。

「くあああっ！！　あああっ！！　んんっ！！！」

左手は胸を力強く荒々しくもみ込み、時には力強く押さえつけて、男とミカサの身体を密着させる。

がちり掴んでいる両足からも分かるくらい、ミカサの身体は痙攣し始め絶頂の時が近づいていた。

(処女なのにめちゃくちゃ感じてるなミカサ……たまんない)

首筋に甘いキスをしながらミカサを攻める男。

膣口から漏れる愛液を確認していると、感じたことによって立ってきたクリトリスに気付く。

男はその敏感に勃起したクリトリスを親指で弄びながら、さらに激しく二本の指で掻きまわし始める。

ぐちゃ！！ ぐちゃ！！ ぐちゃ！！ ぐちゃ！！！！

「ふああああああ！！ そこはっ！！！！ はああっあ！！！」

「どうしたのミカサ？ 気持ちよくなってきちゃった？」

クリトリスを弄られたことにより、目を見開き感じてしまうミカサに挑発的な言葉を投げかける。

「くあっっ！！ きもちっ！！ よくなんか……んああっ！！！！」

我慢して抵抗するミカサだが、どう考えても感じている。

男は絶頂寸前のミカサにさらに刺激を与えるため、右の乳首を思いっきり摘まみ胸を引っ張る。

さらに膣内への刺激もラストスパートと言わんばかりに激しく攻め立てた。

膣内の肉は愛液をだらだらに漏らしもはや指では満足できないといった感じで肉壁が指を貪るように絡みつけて吸引する。

ぐちゃ！ ぐちゅっ！ ぐちゅ！ ぐちゅ！！

敏感に勃起したクリトリスを弄りさらには手マンと乳首攻めに処女のミカサがこの快感に抗えるはずもなくはずもなく……

「んんっ！！！！ ああああっ！！ あっ！ くああああああああ！！！！」

びっちゃああああああああ！！

膣内を攻めていた男の手に思いっきり潮が吹かれる。

そして思いっきり腰をエビぞらせて顔を逸らせて絶頂に達するミカサ。

男はその時、ミカサの首元にマーキングするかのよう思いっきり吸い付いてキスマークを付ける。

じゅっぢゅううううううう！！

「ぶあっ！ はあ……はあ……」

「ああ……はっ……はあ……はあ……はあ……」

よだれを垂らし男にすべてを委ねるように体重を掛けて絶頂で倒れ込むミカサ。

眼には涙を浮かべて、今何が起こったのか分からないくらいの放心状態になっている。

「どう？ ミカサ……気持ちよかった？」

男はミカサを力強く愛おしそうに抱きしめて問いかける。

「くっ……」

意識が少しだけ戻ったミカサは、歯を食いしばって眉間に皺を寄せ、怪訝な表情をのぞかせながらそっぽを向いた。

そんなミカサの顔を右手で強制的に男の方に向けさせて、またもディープキスを始める

「んじゅる……んちゅ……んちゅ……じゅる……」

「んあっ……んっ……んちゅっ……じゅるっ……れろっ♡」

苦悶の表情はしているが、ミカサは男の舌を受け入れてディープキスし返していた。

「くちゅ……んちゅ……ミカサ……めちゃくちゃかわいいよ」

「くちゅ♡ はあ……はあ……んっ……」

男にそう言われたミカサは目を反らすように顔を背ける。

男はミカサの下から抜け出して、そのままミカサをベッドに寝かせて、左手をミカサの右手と恋人繋ぎしながら、絶頂し火照ったミカサの身体を見ながら肉棒を扱き出す。

「はあ……はあ……はあ……ミカサ……めちゃくちゃエロくてかわいい」

「んっ……」

ミカサは顔を左側に向けてその顔を左腕で覆ってはいるが、男が自分の身体に興奮しながら必死に肉棒を扱いているさまを、薄目を開けて覗くように見ている。

(私の身体を見て……興奮して……そんなに……)

もう何回か射精しているはずの勃起チンポは、まだまだ物足りないと言わんばかりにいきり立ち、亀頭がミカサを見つめている。

男の手を繋ぐ力が強まっているということは、恐らく射精が近づいているということ。

「……………」

(もうすぐ……^で射精る……)

無意識のうちに男の反応で射精の瞬間が分かってきたミカサは、自分でもわかっていないが、男が強く握っている手をギュッと握り返してしまっている。

「はあ……はあ……はあ……うっ！！！！」

ドピユユユユユ！！ ドピユっ！！ ビユルッ！！ ビユルルル！

「……っ！？ んっ……♡」

(熱い……まだこんなに……)

男がミカサの胴体めがけて一気に欲望にまみれた白濁液を掛けて、ミカサの身体を外側から犯していく。

胸や腹筋にべっとりと湯気が立ちそうなくらい熱々の精子が自身の身体に掛かっていることを温度と視覚で確認するミカサ。

「ゴクッ……」

そして男は今度は両手でミカサの身体に降り注がれた自身の精液を、ミカサの身体に刷り込ませるために、腹筋や胸を触り始める。

「んっ♡」

(また……私の身体に……精液を……)

ぴちゃ……くちゃ……

ミカサの鍛え抜かれた腹筋を揉み込んでいくように精液を刷り込んでいく男。

他人にここまで腹筋を触られたことはなく、好き勝手にされていることに本来は苛立ちを感じるはずだが、絶頂したことや生臭い精液の臭い、さらには男が自分をかわいと言ってくれたことにより、思考回路が緩んでしまい判断が鈍ってしまっているミカサ。

(そんな……腹筋を……愛でるように……)

「んっ♡」

男を興奮させるために鍛えたわけではない腹筋。

その腹筋をまるで自身の所有物化のように好き勝手に男は触り続ける。

ミカサは、自分で身体を触るよりも敏感な感覚が腹筋から伝わってくることに思わず声が漏れてしまっている。

ゆっくりと、愛おしそうに、精液を擦り込ませながら大きな手がミカサの腹筋を犯していく。

「んっ♡ はぁ♡ はぁ♡」

段々と今まで感じたことがない未知の感覚が脳に感じられて、下半身が切なさを感じて思わず股を閉じて少しもじもじし始めるミカサ。

男はそのミカサの反応に気付かずに夢中で腹筋を触り続けている。

「ミカサ……チンポの治療が終わるまでは……この腹筋……いや、ミカサの身体はこのチンポのものってことでいいよね？」

ミカサはこの質問に対して、少し疑問を感じたが、実際に自分が完治するまで世話をするといい手前、男の発言に了承してしまう。

「わかってる……完治するまでは……あなたのもの」

「ごくっ……」

それを聞いた男はまた興奮が高まってきたのか、腹筋を撫でていた両手をゆっくりだが力強く胸に持っていき、今度は精液を胸に刷り込んでいく。

「んあっ♡」

敏感になっている乳首に男の手がこすれて、艶めかしい声が漏れてしまうミカサ。

その反応を見てたまらなくなった男は、両乳首を優しく摘みながら胸を揉んでいく。

くにゅくにゅと乳首を摘まむと、敏感に反応して少しづつ硬さを増して卑猥に勃っていくミカサの乳首。

「んっ♡ んあっ♡ くっ♡ つっ♡」

「感じてるのミカサ？ いっぱい気持ちよくなっていいよ」

「んっ♡ そんな……こと……ないっ！ くうう♡」

どう考えても乳首を摘ままれ感じてしまっているミカサ。

性的快感から逃れるように頭を反らせて歯を食いしばり、耐えている。

だがミカサの身体全体は切なさを覚えて小刻みに痙攣し、もじもじと震えている。

もにゅもにゅと弾に乳首を摘まみながら胸全体を覆うように揉み込んでいく男。

(私の胸……なんでこんなに……)

「んっ♡」

自分の身体の反応に思考が追いついていかないミカサ。

軽く絶頂しかけそうになったところで男が胸を揉むのをやめて、ミカサの背中を抱きかかえるように両腕を回して顔を近づけてくる。

「ミカサ……」

とろけるような表情と潤んだ瞳で男の顔を見つめ返すミカサ。

男が何をしたいのかを察したミカサゆっくり大きく口を開けて、口の中のペ口を伸ばした。

男がミカサの伸ばしたペ口に自身の舌を這わせるように絡ませながら、二人は口を合わせてペ口チューする。

「んくちゅっ……じゅるっ……れろっ……んちゅ……」

(これは……キスじゃない……口の中を好き勝手されないために……私もペ口を動かしてるだけ……)

「くちゅ♡ ぢゅう♡ くちゅ♡ んあっ♡ んちゅ♡」

必死に脳を刺激する官能的な快感に言い訳をしながら抵抗するミカサだが、口の中で絡ませる舌の動きは明らかに積極的になっていく。

男の口から流れてくる唾液の味も最初は飲むのさえ嫌だったが、今は物欲しそうに舌を動かし、口の中で味わいながら喉奥に流し込んでいる。

「んくっ♡ ごくっ♡ んちゅ♡ んっ♡ ちゅるっ♡」

ずっしりとした男の重さを感じながら密着され体温が伝わってくる感覚に心地よさを覚えてくるミカサ。

男が身体を密着させていることによって、再び肥大した肉棒がミカサの下腹部辺りに擦りつけられている。

(また……硬くなって……興奮してるの……)

「んちゅ……んあっ……ミカサがかわいいから全然興奮が収まらないよ……明日もよろしくね……んちゅ……くちゅ……」

「んっ……くちゅ♡ じゅるっ♡ んあ……わかった……くちゅっ♡」

ミカサが明日も了承してくれたことに興奮した男はより強くミカサを抱きしめるように身体を密着させる。

お互いの胸と胸は擦れるように引っ付き合って、時折乳首がこすれて、軽く感じているミカサは下半身を閉じて切なく動かしてしまう。

切なさから逃れるすべを考えた結果、ミカサは両腕を男の背中に回して、抱き着くように男を自身の身体の方へ押し寄せる。

ミカサの変化に気付いた男は、さらに強くミカサの口内を貪るように犯し始める。

「んっ！！！！ んじゅるっ……ちゅっ……じゅるっ……ミカサ……ちゅるっ……セックスしたくなったら……いつでも言ってね……」

「んちゅっ♡ くちゅ♡ ぢゅるっ♡ んっ……セックスは……しない……じゅるっ♡ れるっ♡ じゅるっ♡」

そう言ったはずのミカサの両腕はさらに力を増して男を強く求め、二人はまたしばらくの間、心地よい気怠さの中のディープキスを味わっていた。

3

次の日。

夜、空き部屋。

すでに男は全裸になって肉棒を勃起させており、その目の前には黒いスポーツパンツだけを着たミカサが、胸元を左腕で隠し、乳首を見せないようにして、少し恥ずかしそうに斜め下に視線を逸らしながら顔を赤らめ立っていた。

「ゴクッ……」

改めてミカサの肉体を男は凝視する。

腹筋は言わずもがな、腕にもしっかり筋肉が付いており、美しいとさえ思える肉付き。

筋肉がしっかりと付いているにもかかわらず、意外と胸は女性陣の中でも大きい方だというのがまた情欲を掻き立てる。

下半身は割と肉付きが良く上半身ほどの筋肉質さはないが、張りがあり健康的でみずみずしい太腿は、見ただけで性的興奮が増して下半身を熱くさせるに十分すぎるほどの魅力を放っている。

そしてなにより、この素晴らしい身体つきをしているにもかかわらず、綺麗な黒髪が靡く美しく端正でどこか性的魅力の詰まった顔。

(昨日チンポ擦りつけたときに思ったけど.....やっぱミカサはチンポ顔だ！！ 勃起チンポがミカサの顔にはよく似合う！！)

ミカサの端正な顔立ちと、グロテスクに肥大した肉棒のコントラストはあまりに官能を刺激する組み合わせで、男の脳を刺激していた。

「ミカサ.....」

我慢できなくなった男は今日もまずはミカサとキスをするため近づく。

「んっ.....」

ミカサも男が何をしたいかを察して、近づいてきた男を上目遣いで見つめながら口を開ける。

ミカサの表情からは不快感が少しなくなりつつあり、昨夜の絶頂が効いているようだ。

男はまずミカサを抱きしめて、優しく背中に手を回す。

「ミカサ、ミカサも両腕で抱きしめてくれると興奮が増えてチンポの治療にも役立つんだ。だからお願いできるかな？」

「.....」

ミカサは眉間に皺を寄せて少し悩んだが、ゆっくりと男の肩に腕を持たれかけて首に手を回して抱きしめる。

ミカサの潤んだ瞳が男を見つめ、潤いがあり、唾液で少し濡れ輝いている唇の中から淫らな舌が這い出てくる

「はむっ.....んちゅ.....くちゅ.....ぢゅるっ.....」

二人はそれが当然と言わんばかりに唇を重ねて、口内でペ口を絡め合わせた。

お互いの唾液が欲しいと言わんばかりにベ口が力強く淫音を奏でながら絡まり合う。

ミカサの舌も男の舌の動きに合わせてるように絡め合わせてくる。

男はキスをしながらミカサの背中を両手でゆっくりだが力強く撫で始める。

自分よりも小さい背中なのだが、明らかに筋肉がしっかりと付いており、硬さを感じさせる背筋を愛でるように撫でまわす。

(ミカサの背中めっちゃ硬いけど、それがまたなんていうか……かわいっ！！！！ ていうかやっぱ筋肉にも工口が詰まってるっ！！！)

男にとってはミカサの鍛え上げた身体は、下半身を熱くさせる興奮剤になっている。

ミカサも男が自身の背中を性的に触っていることに気付いたのか、少しずつ頬が赤くなっていく。

ミカサのベ口の動きが少し強くなったことを感じて興奮した男は、背中を撫でていた手を、今度は尻に手を這わせる。

「……んっ！！ くちゅ……んちゅ……じゅるっ」

男の手が自身の尻に触った瞬間に、顔を歪めてしまうミカサ。

だが特に抵抗はなく、そのまま男とのキスを続けている。

男の勃起したペニスが自身の下腹部に押し付けられているため、興奮していることが分かり、早く治療を終わらせるため、多少の不快感を我慢しミカサは男の好きなようにさせる。

(ミカサのデカ尻……プリプリで柔らかい！！ 一生揉める！！)

ミカサの尻は明らかに女性陣の中で一番大きく、ズボンの上からでもはち切れんばかりの肉付きだということが分かるほど、ジューシーなデカ尻をしていた。

実際にその尻を触ってみた男は、背筋の肩さとは程遠い、柔らかく指が沈み込む尻肉のギャップに驚きと興奮がありもにゅもにゅと夢中で触り込んでしまう。

男が尻を勢いよく揉み込むと、スポーツタイプの黒いパンツが包み込む尻肉がうねうねと卑猥に歪み、パンツがずれて行ってどんどん食い込まれていく。

「んっ♡……お尻をそんなに……」

ミカサが唇を離して、唾液が垂れるのを放置してまで男が尻を揉んでいることに抗議してくる。

だがその顔は不快感で歪んでいるにもかかわらず、どこか物欲しそうな感じもした。

「ごめんミカサ。ミカサの尻が魅力的過ぎて……ほらこのパンツからはみ出たお肉とか」

そう言いながら男は、パンツがずり上がって、はみ出したように出てしまっている尻の下の方の肉をムニムニと優しく摘まみ始める。

「んっ……そんなこと……」

ミカサは歯を食いしばりながら、男の首元に顔を埋める。

その姿は感じているのを必死に我慢しているような姿だった。

男は尻を揉んだ後、ずり上がったパンツを下に引っ張って食い込みを治すようにパンツから手を離れた。

パンっというゴムが弾ける小さい音が響いて、立っていて下を覗き込んでも分かるくらいミカサの尻が全体的に大きく揺れた。

「んっ♡」

ミカサから小さく声が漏れたことで男の興奮が高まり、両手で力強く尻を叩くように触る。

パンツ！！！！

「んあっ！！」

デカ尻が激しく揺れて、少し赤く染まる。

「んっ……叩くのは……やめて……」

「ごめん、つい興奮しちゃって……」

男は謝りながら、痛みを感じたであろうミカサの尻を癒すように再び優しく撫でていく。

尻もそれに喜んでいるかのように、肉を躍らせながら男の指を受け入れるように卑しく蠢く。

叩くはやめてほしいと言ったにもかかわらず、ミカサの黒いパンツの秘部の部分は少しだけだが湿って濃くなっていた。

「今日はミカサにやってほしいことがあってさ」

「ん……何をするの？」

「チンポを舐めて欲しいんだ」

.....

.....

.....

「んっ.....くっ.....」

ミカサはしゃがんで立っている男の股間部分に顔を近づけて、肥大したペニスと対峙している。

しゃがんでいることによって黒いパンツのスケベ尻が突き出た状態になっているのが、これまた工口く見えて括約筋に力が入ってしまった男のペニスがぴくぴく蠢き、ペチペチとミカサの頬に当たってしまう。

「くっ.....」

ただでさえ不快なものが自分の頬に当たって、頬が上気して赤くなっているとは言え、不快感を強く出し、歪んだ表情を見せるミカサ。

治療を手伝うとは言え、肥大しグロテスクに血管の浮き立った勃起チンポにはやはりまだ抵抗があるようだ。

「これを.....舐めないといけないの？」

できればやりたくないという思いが強く込められた発言をするミカサ。

「うん。できれば舐めるっていうか、口で加えたりして射精を促すフェラチオをやってほしいんだ。ほら、傷口とかを咄嗟に舐めたりすることとかあるでしょ？ あれと同じ感じだよ。チンポも舐めたほうが手っ取り早く射精するんだ」

疑惑の念があるミカサを何とかその気にさせるために、男は言葉巧みにフェラチオにいざなっていく。

「まずは舐めるだけでもいいからさ.....チンポに慣れておけば、これからの治療もうまくこなせると思うし.....」

「.....」

男とチンポを睨みつけ、逡巡しているミカサ。

生臭いがミカサの鼻腔から入ってきて脳に広がっていく。

「すー.....ふう.....わかった」

「ありがとうミカサ！！！」

深呼吸して決心したかのように目を閉じてチンポを舐めることを了承するミカサに感謝の言葉を投げかける。

ミカサは男の太腿に両手を置いて身体を支え、やはりまだ抵抗がある不快感の表情で眉間に皺を寄せ、チンポを下から見つめている。

「ミカサのタイミングでいいからね、最初はチンポに鼻を付けて匂いを嗅いでみるのはどうだろう」

そう言われたミカサは男の目を訝しげに見つめる。

明らかに怪しんでいる目を向けられて冷や汗をかく男だが、ミカサはチンポを見つめなおすと、ゆっくりと鼻をチンポに密着させていく。

亀頭の部分は少々怖かったのか、ミカサはまず、竿の左側に自身の鼻を付けて匂いを嗅ぎだす。

「すんっ…………すんっすんっ」

ミカサの鼻の硬さと、肌の柔らかさがチンポから伝わってくる。

眼を細めながらチンポの臭いを嗅ぐその姿は、あまりにも卑猥でスケベ女感が出ており、興奮のあまり男は下半身を震わせる。

ミカサは鼻をチンポに這わせながら亀頭の方に向けて顔を移動させる。

「すんっすんっ……すーふう……すーふっ……」

鼻がカリ首の臭いを嗅いでいきながら鈴口の方へ移動していく。

丹念に鼻息を漏らしながらチンポの臭いを嗅いでいるミカサが愛おしくなり、男は左手で優しくミカサの頭を撫で始める。

「んっ……」

一瞬ミカサは男の腕を横目で確認した後、またチンポの臭いに集中しだした。

「くっ……どうかな……匂い？」

「んっ……生臭くて……変な匂い……」

ミカサの眉間には皺が寄っているのだが、不快感というよりも、チンポの臭いを吟味しているような表情に見えてしまう。

鼻の感触がこそばゆくチンポから伝わってきて、興奮が増した亀頭から少しずつ我慢汁が漏れ始める。

「んっ……」

ちょうど亀頭の先端に鼻を持ってきていたミカサの鼻下に我慢汁が付着して輝きを帯びる。

一旦ミカサはそこで顔を離してチンポを見つめる。

性知識の乏しかったミカサでも、鈴口から我慢汁が漏れてきたということは、射精が近づいているということはさすがにもうわかっている。

実際に男の顔も射精を我慢しているのか気持ちよさに歯を食いしばっている。

「……………すー……ふう」

ミカサは少し考え込んだ後、チンポの舌に顔を持って行ってペ口を突き出す。

「れろっ……じゅるっ……れろっ……ぢゅるっ」

不快感で顔を歪ませながらも、チンポの裏側を優しく舐め始める。

「うおっ……くっ！！」

ミカサのペ口の感触がチンポの舌から伝わってくる。

全力で集中して男はチンポから伝わってくる性的感覚を脳に取り込もうとする。

「れろっ……んっ……れろっ……れろっ……」

ざらッとしているが柔らかく、少し生暖かいミカサのペ口が、優しくチンポの裏側を舐めている。

尿道海綿体で浮き上がっているチンポの裏の中央部分をなぞるように隙間なくゆっくりと舌を這わせるミカサ。

ミカサの唾液のぬめった感触で、隙間なくチンポの裏側を舐められていることが脳に伝わってくる。

浮き出ている血管さえもまるで愛おしそうに舐めるミカサ。

「れー……ろっ」

ミカサが根元から亀頭に向かって下から勢いよくチンポを舐める。

「うおっ！！」

あまりの勢いと敏感な気持ちよさが股間を走り、力強くチンポが揺れてミカサの顔にぺちっと当たる。

「んっ……」

不快感を出しているにもかかわらず、割と積極的にチンポを舐めだしたミカサに下半身が熱くなり、ペニスの内側からドクドクと、精液が押しあがってくる。

「れろっ……れろっ……んあっ……れろっ……んっ」

今度はミカサは亀頭周りを中心に舌を動かします。

ペ口をうまく使ってうねらせながら亀頭の表面を舐めていき、鈴口にもペ口が触れるため、おのずと先走りがミカサの舌に付着してしまい味わうような形になる。

普段は絶対に見ることがないようなミカサのチンポを舐める舌の卑猥な動きに、ますます興奮した男は気持ちよさで、前かがみのような状態になる。

「ミカサ……チンポ舐めるの好きになっちゃった？ めちゃくちゃおいしそうに舐めてるよ」

「ぺちゅ……くちゃ……れろっ……違う……これは……んあっ……早く射精させるため……えろっ……おいしくなんか……んっ……ないっ」

男の挑発するような発言により顔を歪ませるミカサだが、頬が赤く染まっている状態で夢中でチンポを舐める姿は、どう考えてもチンポ好きにしか見えない。

そんなチンポ好きにしか見えないミカサは今度は、舌先をうまく伸ばして敏感なカリ首をチンポの右側から舐め始める。

「うおっ！！」

敏感な部分に、力を入れて硬くなった舌先がにゆるっと侵入してきたことで、気持ちよさのあまり腰が抜けそうになったのを堪えてビクンと震えてしまう男。

ミカサはその男の状態を見つめて、一瞬考えるように止まっていたが、再び舌先に力を強め、カリ首を攻撃します。

「えー……ろっ……れー……ろっ……じゅるっ」

ペ口だけではなく、顔も器用に動かしていきながら、カリ首の溝をなぞるように、唾液をたっぷり含んだ舌で責め立てる。

「うおっ！！ くおっ！！ くう……」

敏感なくぼみを執拗に力強く攻められて、脳が痺れる快感のあまり、下半身を痙攣させて、耐える男。

一瞬目を瞑って耐えた男が再び目を開いてミカサを見てみると、ミカサと目が合った。

「っ!？」

その目はまるで射精しろと言わんばかりに男を責め立てるような無言のプレッシャーを放っており、それと同時に、チンポを見ずに舌の感覚だけでカリ首を探る様に舐めまわしている姿は、まるで精液を主食にしている獣のような卑猥なメスのようだった。

(なんつーエロい状態だよ!!! 完全にチンポ好きだろこの筋肉女っ!!!!!!!!!!)

「れろっ……えっ……れろっ……れろっ……」

蛇のような動きをするミカサの舌先がカリ首を半周した後、一番敏感な陰茎小帯まわりに侵入してきた。

「くう!!!」

男の強い反応もチンポのビクつきを感じ取ったミカサは、さらに舌先に力を込めて亀頭の裏側の陰茎小帯周りのくぼみに舌を突き入れる。

「れろっ……れろっ……れろっ……れろっ」

突き入れた舌先を小刻みに動かしながら裏側を攻めるミカサ。

チンポが溜まらず逃げるように上に反り返るが、逃がさないとはばかりにミカサも顔を動かしチンポを追っていきながら執拗に陰茎小帯を責め立てる。

「れろっ……れろっ……れろっ……れろっ……」

力強く小帯の周りを左右に舐めまわし射精を促しているミカサ。

「くあああっ!! くっ……うあっ!!」

そんなミカサのチンポへの攻撃に男の敏感な童貞チンポが耐えられるはずもなく、情けない声をあげながら射精してしまう。

ドピユユユユユ!! ビユルッ! ビユルッ!! ビユルルルルルルル!!!!!!

「あっ! 熱いっ!! くっ……」

チンポを舐めていたミカサは、ドクドクと精液が上がってきていたことは舌から伝わってきていたが、思ったよりも早く男が射精してしまったため、顔面にまともに熱々の白濁液を受けてしまう。

「うあっ……くっ……はあ……はあ……」

びゅっ……びゅっ……

「んっ……」

最後の一滴までチンポから出た精液がミカサの顔面に降り注がれる。

不快な顔をしてはいるが、ミカサは自分の顔に降り注がれる精液を避けずに受け入れている。

顔面にマーキングされたかのようにドロドロの白濁液パックを掛けられたミカサはゆっくりと目を開ける。

「ふう……ふう……」

表情こそは眉間に皺を寄せているが、瞳はどこか物欲しそうにうるんでいる。

「ごくっ……」

あまりにエロいミカサの顔射マーキング顔を見て、男はたまらなくなり、また自分の精液を飲ませるために、ミカサの顔に掛かっている精液を指で救って集めだす。

「んっ……あっ…」

ミカサは男がしていることを察し、受け入れて、男の精液がべっとりと付着した指を舐めるためにゆっくりと口を開けた。

「んくちゅ……くちゅ……ちゅぱっ……じゅううう……じゅるっ♡」

男が右手の人差し指で、ミカサの顔にべっとりとこべり付いている白濁液をかき集め、それを流れるように口元へ持っていき、ミカサのピンク色の弾力のある唇を通して口内へ入れていく。

するとミカサは男の指に吸い付いて、若干甘噛みしながら口内へ固定し、ほっぺをすぼめるくらいの吸引力でバキュームし、下品な音を立てながら精液を貪り喰らう。

「じゅぼっ……んぼっ……じゅるっ……くちゅ……」

まるで指をフェラチオしているかの如く、舌を絡めさせ口をすぼめて吸い付いてくるミカサ。

試しに男がミカサの口内で人差し指を抜こうとすると、口内の吸引力により強制的に指が口の中へ戻されてしまう。

唇を捲らせるくらいの吸引力で戻された男の指は再び口腔で犯され始める。

すでに精液はすべて舐めとられたはずにも拘らず、まだ足りないと求めるように根元の方まで舌を這わせて指フェラを行うミカサ。

軽い絶頂を感じて以来、少しずつだがミカサの態度が崩れ始めてチンポを求めるような

感じが伝わってきている気がすると男は考えていた。

指を愛おしく舐めているミカサの頭を撫でてると、ミカサはうっとり自分を見つめる男の顔に気付き、指から口を離す。

「んっ……ぶあっ……」

ミカサの唾液の糸が指に付き、艶のある光を放ちながら曲線を描き、伸びて切れていく。

男がミカサがしゃぶっていた人差し指を味わうように口の中へ入れて咀嚼していると、ミカサは夢中で指をしゃぶっていたことが恥ずかしくなったのか、目線を逸らして目を合わせないようにしていた。

その顔は羞恥で真っ赤に染まり、唇はバツが悪そうにカんで震えている。

そんなミカサの反応を見て、その顔の前に再び元気を取り戻した肉棒が様子を伺うようにむくりと起き上がる。

「……………っ」

自身の顔の前で肥大した勃起チンポを忌々しそうな表情で横目でにらむミカサ。

「次は口で啜えながらチンポをしゃぶってもらっていいかな……フェラチオって言うんだけど……」

「啜える？ こんなものを……」

さっきまで獣のようにチンポを貪り舐めていたにも拘らず、正気に戻ってしまったのか、また不快感をあらわに眉間に皺を寄せて厳しい表情でミカサはチンポを睨みつける。

そんなミカサに啜えてもらうために、男は括約筋に力を込めてチンポを動かしてかわいらしさをアピール……

したのだがより一層ミカサは侮蔑の表情が濃くなり、気持ち悪いものから遠ざかる様に顔を少し後ろに下げる。

「可愛くない？ 啜えてほしそうにアピールしたつもりなんだけど？」

「別に……むしろ気持ち悪い……」

男はミカサが昨夜の絶頂によって少しは性的な興奮に目覚めてチンポにむしゃぶりついたと思っていたのだが……

(まだまだ先は長いということかな……じゃあここは……)

とにかくフェラをして欲しい男は条件を付けてミカサにお願いする作戦に移った。

「今日はフェラチオで射精したら終わりでもいいからさ？　ね？」

「……………」

それを聞いたミカサ逡巡するように男とチンポを交互ににらみつける。

(恐らくはミカサは今自分の身体を弄られることは嫌なはずだから……そこを逆手にとるしかない)

実際にどう思っているのか男の知る由ではないのだが、少しの間後、ミカサが深呼吸して意を決したようにチンポに顔を近づける。

「ふう……………はむっ……………」

「うおっ！！！！！」

射精して間もない敏感な亀頭に生暖かく粘つきブニブニとした感覚の口腔が襲い掛かってきた。

「んっ…………じゅるっ…………ぢゅるっ…………ぢゅっ…………んぶっ……………」

ミカサの唇が肉竿の真ん中あたりで止まり、亀頭付近を口内のベ口で責め立てている。

唾液をたっぷり含んだ口腔で、吸い付きながら執拗に亀頭付近を舌で舐り回してくる。

先ほどのチンポ舐めで、亀頭付近が敏感で射精を促しやすいと悟ったミカサは早く終わらせるために亀頭を重点的に狙っているようだ。

「くぅ…………ミカサ…………気持ちいいけど…………口の中に入れてまま、チンポを出し入れしてくれる？」

「んっ…………じゅるっ…………じゅぼっ……………」

チンポを舐める淫音を室内に響かせながら、支持をしてきた男の顔を睨みつけるミカサ。

だがこれまで男がチンポを自身の身体を使って射精してきた動きを思い出して、確かに抽送が効果的であるということをミカサもわかっていた。

「んっ…………じゅぼっ…………ぢゅるっ…………んぼっ…………ぢゅるっ…………ずちゅっ…………ずりゅっ…………んぼっ……………」

「くあああああ！！　くううう！！」

男の太腿を少し力を加えて掴み、先ほどよりも余計に粘り気のある淫音を響かせながらミカサが口でチンポのストロークを始める。

生暖かくヌルヌルとした口腔の感触が敏感な勃起チンポに襲い掛かってくる。

ミカサは体力があるためか男が思っていたよりも口腔の吸引力が力強く、チンポを口内へ挿入れるときはもちろんなのだが、離れるときもすさまじい力でチンポに吸い付いてくる。

動作自体はそれほど早くないものの、大きな淫音が立つほどの吸引力で唇が捲れ上がっており、頬をすぼめてひよつとこ顔になっているさまは、滑稽だがそれ故に下品な姿が工口く、ドクドクと精液がのし上がってくる。

「んぐっ……じゅぼっ……ぶちゅう……じゅるっ……んぼっ……じゅううう……んぐっ……」

眉間に皺を寄せて不快な表情をしているにもかかわらず、口をすぼめてバキュームフェラしているアンバランス間に、もはや何も考えられないくらいの真っ白な気持ちよさに脳が襲われている男。

男は尻の穴に力を込めて、できるだけこの幸せな時間が長く続くように必死に射精しないように我慢していた。

だがそんな射精を我慢してこわばっている男の表情を見て、ミカサは射精しろと言わんばかりにチンポを責め立てる口腔の動きを強めた。

「んぐっ……じゅるっ……れろっ……えろっ……ぐじゅるるるっ……んぶっ……ぢゅるっ……ぢゅるううう！」

先ほどまでは抽送しているだけだったが、口内で舌も動かし始めて亀頭周りや肉竿を舐め始める。

チンポに吸い付くときに、射精しろと言わんばかりに鈴口に入りそうなくらい舌先を強く押し込ませようとして、ヌルンツと亀頭に舌先が滑る。

逆に口から離そうとするときは、肉竿までペ口を伸ばして肉棒が恋しいかのようにゆっくりと全体的に舐めまわしてくる。

時折、唇から漏れ出てくる舌があまりにも下品で卑猥で、普段のキリツとしたミカサからはかけ離れたギャップの工口さに、下半身を震わせながら必死に男は射精を耐えている。

「じゅるっ……あむっ……あんっ……んぐっ……じゅるっ……ずちゅうう……れろっ……」

「うおおおおあああああああ！！！」

さらにミカサはゆっくりと咀嚼するように口を動かし始めたため、ただでさえ強烈に気持ちいいブニブニとした口腔の感触が強まり、ほっぺの裏の部分も当たるくらいに口をすぼめているという事実がチンポからの感触でも強く分かるようになる。

咀嚼運動のためチンポを甘噛みするように歯も当たってくるのだが、感じる少しの痛ささえも快楽の気持ちよさに変わってしまう。

眉は吊り上がって悩ましく眉間に皺を寄せているにもかかわらず、口腔のすべてを使いチンポを味わうかのように食べているミカサ。

最初の嫌がっていたミカサがやっているとは思えないくらいの快楽がチンポに甘く襲い掛かってきて、2回目の射精とは言え男がそう長く耐えられるはずもなかった。

「くううう！！ ミカサっ！！ 射^て精るよっ！！ ミカサの口につ！！！」

「んっ！！！」

男が射精を宣言してから少しの猶予がまだあった。

にもかかわらず、ミカサはチンポを吸引する力を弱めることはなく、まるで精液を早く欲しがっているかのようにチンポに吸い付いている。

そして……

「くああああああああああ！！！！」

ドピユユユユユ！！ ドピユっ！！ ビュルルルっ！！ ビュルッ！！ ビュルッ！！ ドピユっ！！ ドピユっ！！

「んっぐっ！！ んぐっ！！ ごくっ！！ ごっくっ！！ んくっ！！ ごくっ！！ ごくっ！！ ごくっ！！」

ミカサの口内に溢れんばかりの高熱の白濁液が流し込まれた。

熱さと量から言ってとても処女が飲みきれものではないはずなのだが、ミカサは眉を吊り上げにらみつけるような怒った表情をしながらも、口をすぼめて鼻の舌を伸ばし、男のすべての精子に喰らい付いていた。

ミカサのが喉を鳴らしながら精液をすべて体内に入れている。

「んぐっ……ごくっ……ごくっ……ぶあっ～……」

ミカサが精液を飲み終わり、チンポから口を離れたと同時に、あまりにも気持ちよかった男は腰が抜けてへたれ込むようにその場に尻を付いてしまう。

「はあ……はあ……はあ……ありがとう……ミカサ……すげー……キモチ……よかった……はあ……はあ……」

気絶しそうなくらいの快楽と射精間で朦朧としながらミカサに礼を言う男。

ミカサは男が座り込むと同時に付いてくるかのように、四つん這いになっており無言で

男の気持ちよさそうに頬けている顔を見ている。

「……………ごくっ」

「……ミカサ？」

ミカサは喉を鳴らした後、再び男の股間に顔を鎮めて、射精したチンポを見ながら、四つん這いになり突き出したフェラ尻を物欲しそうに左右に揺らし始めた。

意識的に尻を揺らしているのか無意識なのかは男にはわからないが、美しい顔がチンポのそばにあり、鍛え上げられた背筋を逸らせて、肉厚のありそうなお尻を黒いパンツで包み込み、四つん這いになっている姿は男の肉棒を再び勃起上がらせるには十分すぎる卑猥な光景だった。

ミカサはムクムクッと起き上がった肉棒に顔を近づけ、右手の人差し指で射精後の敏感な亀頭を弄びながら、匂いを嗅いでいるかのように深呼吸をしている。

「すー……ふう……精液は、身体に良いつてあなたは言った……」

「うくっ！！ そう……だけど……」

「そう……だったら……あー……んっ……」

……………

……………

……

ミカサは再び男の勃起した肉棒を咥えると、今度は容赦なく根元まで一気に丸呑みした。

勃起しているとは言え、射精直後の敏感チンポがミカサの力強くも柔らかく温かい口腔の気持ちよさに耐えられるはずもなく、男は情けなく声を上げてしまう。

「うおおっ！！！！ おほっっ！！！！ くっ！！！！」

「んぐっ……んくっ……んっ……」

ミカサの口内で快楽によりチンポは小刻みに震え、肉棒の裏面を覆うようにベ口が這わされているため、その舌から男が敏感に感じているということが伝わってくる。

(生臭い匂いが口の中から伝わってくる……そしてこの味……しょっぱい……)

ミカサは口の中で咥えたままチンポの味を確認するかのよう動きを止めている。

鈴口から漏れてきた我慢汁がチ口チ口と直接ミカサの喉元に流し込まれていく。

「んぐっ……ごくっ……」

(粘っこいけど……これは……精液じゃない？)

ミカサはまだ喉元にしつこく残っている精液を流し込むかのように我慢汁を喉を鳴らしながら飲んでいく。

そしてゆっくりとだがすさまじい吸引力で、舌先に力を加えて裏筋をなぞりつつバキュームしていきながらチンポから口を離していく。

「じゅるるるるるるるるるるるっ！！！！！」

「ううううおおおおおおああああああああ！！！！！」

「ぢゅううううううううう……んっ……ぷあっ！」

「あっあああ！！ ああ……はあ……はあ……」

ミカサが口を離れた瞬間チンポが勢いよく放たれ上下に揺れ動く。

根元までチンポを思いっきり加え込んだため、ミカサの口元に男の陰毛が付いているのだが、それに気づかずに男の表情を見つめて観察している。

(気持ちよさそうにしてる……)

「れろっ……れろっ……えー……」

「くっ……くああ！！！」

ミカサが舌先に力を入れて亀頭付近を乱暴に舐めまわしたり、尿道の中にベ口を入れようと強く押し込んだりしていると、男は必死にこらえる表情で快楽を感じていた。

舌先に力を入れた力強い舐めまわしなので、その快楽から逃げるようにしてチンポが動き回ったり跳ね返ったりしている。

(味は……変だけど……別に……匂いも……そこまで……)

上目遣いに男の反応を見ながらチンポを舐め続けるミカサの脳は、少しずつだが、チンポに犯されていっていた。

そもそもが見事に鍛え上げられた肉体を持つ、筋肉少女。

普段の運動量もさることながら、体力も相当にある肉体が性の刺激を今まで欲していなかったことの方がおかしい。

明らかに絶頂を感じたことにより、性のスイッチが入ったミカサは、グロテスクに勃起している肉棒への抵抗感が薄れつつあった。

「れろっ……れろっ……れろっ……」

「くっ……くあっ……はぁ……ミカサ……チンポ美味しい？」

「……っ!？」

男に指摘されて、尻を振りながら夢中でチンポを舐めている自分に気付いたミカサの表情はすぐに不快感をあらわにして、否定的な言葉を投げかけた。

「別に、おいしくない……これは早く射精させるためにやっているだけのこと」

「そうなん……うおっ!!!」

男の卑しい顔と気づかずに夢中でチンポを舐めていた自分に苛立ちを覚えたミカサは、責め立てるように再びチンポに一気に貪りついた。

(そう……これは早く射精させるため……それだけ……)

「んじゅるっ!! んぐっ! ぢゅるっ!! じゅうう!! じゅるっ!! れろっ!! んぶっ!!」

下半身に感じる熱い切なさを否定するかのようになりながら、ミカサは再び眉間に皺を寄せて眉を吊り上げ肉棒を吸引しだす。

すさまじい力強さの吸引力で肉棒の根元までを丸呑みしながら、口内でペロを使ってチンポ全体を舐めまわしていく。

「んつぶっ!! れろっ!! んぼっ!! んじゅるっ!! んぐっ!!」

喉奥に吸い込むときは肉棒の浮き出た血管をなぞるように舌先を這わせていき、唇付近まで亀頭が来た時にはカリ首のくぼみを重点的になぞっていく。

「くあっ!!! くっ!! うううう……」

(気持ちよさそうに我慢してる……くぼみの部分を舐めれば……)

チンポを舐めているときからの学習を活かして、男を性的に攻め立てていくミカサ。

精液を本格的に摂取してしまったミカサ、筋肉バキュームフェラで男の白濁の欲望を吸い出そうと、チンポに貪りついている。

唾液のたっぷり含まれた湿っぽい淫音を激しく室内に響かせながら、執拗に男のペニスを線立てているミカサ。

硬くなって口腔で肥大した肉棒を時折甘噛みし足りして、違うアプローチをしていきながら男の反応を伺っている。

(噛んでも気持ちよさそうにしてる……痛くないの?)

ミカサから受ける刺激にはすべて興奮する男にとって、痛みさえも快樂のスパイスになっている。

「じゅるっ!! ぢゅるるうっるっ!! れろっ!! じゅるるるっ!!!」

「うっ!!! くっ!!! うわっ!!!」

表情は不快感をあらわにしているにもかかわらず、どう考えてもチンポ好きとしたか思えない精液を貪りつくすかのようなフェラチオ。

3度目とは言え積極的なバキュームによる射精アプローチに、男が耐えられるはずもなかった。

(どくどくって……脈打って……これが……射精の……合図……くるっ……)

舌を這わせている血管が射精の予兆として脈打ち始め、金玉から放りあがってきた精液が一気に鈴口から噴射される。

「ミカサっ!!! ミカサっ!!! ミカサっ!!!」

男はミカサの名前を叫びながら、しっかりと目を見開き、ひょっとこ顔になりながら自身のチンポを吸っているミカサの顔を見る。

ミカサも射精の瞬間に男の顔を見つめ返して、早く射精しろと言わんばかりに思いっきりにらみつける。

ドピユユユユユ!!! ビュルッ!! ビュルルル! ビュルッ!!! ドピユ!
ドピユ!!

「んぼっ!! んぐっ!! ぐっ!!! ぐふっ!! ごふっ!! んぐっ!! ごくっ!! ごくっ!! ごくっ!! ごくっ!!!」

(熱いっ!!! 精液がっ!! 口の中いっぱいにつ!!!!)

3度目の射精にも関わらず、マグマのような灼熱の精液がミカサの口内に大量に噴出され、ほっぺが膨れ上がってしまう。

その精液を一滴も口の外へ漏らすことなく、チンポを咥えたまま必死に喉を鳴らし飲み込んでいく。

「あっ……んぐっ……げぼっ……くふっ……」

(だめ……多すぎる……飲みきれない……)

ミカサはチンポから口を離し、精液がこぼれないように上を向き口を開けて何とか飲み

干そうとする。

結果的にその状態が、男に口の中に溜まっている精液を見せびらかすような形になってしまい、男の目の前に卑猥なフェラ終わりの精液だまりの口マンコが晒されてしまう。

男の陰毛が複数本付着し、精液で光っている唇、さらには口内を見せびらかしながら喉を鳴らし精液を飲み込もうとするあまりに下品な姿のミカサに男は猛烈に興奮してしまう。

「はぁ……はぁ……ミカサ……もっとよく見せて」

男はミカサを抱き寄せて、頭を撫でてあげながらより近くで卑猥な口マンコの状態を見る。

「くちゅ……ごくっ……くちゅ……くちゅ……ごくっ……んあっ」

咀嚼音を鳴らしながら頬を赤らめ、すべての精液を飲み干した後、確認してほしいかのようにミカサは口を開く。

見事に精液は口内からなくなっており、すべてミカサの体内へ入っていったことが分かる。

「はぁ……はぁ……ミカサ！！」

男は急にミカサにすさまじい愛おしさを覚えて、自身の胸に力強く抱きしめる。

「ミカサっ……可愛いよミカサ……すごくかわいい……」

「んっ……そういうことは……言わなくていい」

男がミカサの頭をなでながら愛でるように抱きしめると、ミカサも恥ずかしそうに胸に顔を埋める。

二人はこのまましばらく抱き合ったまま甘ったるい雰囲気を楽しんでいた。

(……………別に……………こんなこと……………)

4

「じゅるっ！！ じゅぼっ！！ ンぼっ！！ くちゅっ！！ じゅるっ！！！！ れ
ろっ！！ もう……くちゅっ！！ 射精^てるの？ ……れろっ！！」

「ううううううっ！！！！^だ 射精すよっ！！！！ ミカサの口につ！！！！！！ くらあ
ああああああああああああああ！！！！」

ドピユユユユユ！！！！ ドピユっ！！ ビユルッ！！ ビユルッ！！

「んゝんゝんゝっ！！！！ ぢゅうううううううううううっ！！！！ じゅるっ！！！！ ん
くっ……ごくっ……ごくっ！！ ごくっ！！」

ミカサが男の太腿に両手で触れて力を入れながら、チンポをバキュームするために自身の顔を後方へ持っていく。

味を品評するかのように眉間に皺を寄せて、下品に鼻の舌を伸ばし口をすぼめて、唇の内側が捲れるくらいの力を込めてチンポを吸い込み、一滴も精子を逃がさないくらいの意志を感じるフェラチオ。

「んゝぐっ！！！！ んくっ……ちゅぱっ……ごくっ……ごくっ……」

「うほおっ！！！！」

ミカサが勢いよく亀頭から唇を離すと、男は射精直後の敏感の亀頭を刺激されて情けない声を漏らしてしまう。

ミカサはチンポを根元まで飲み込んだことによるフェラで口の周りに男の陰毛が付いているにも関わらず、そんなことは気にしていない様子で丹念に口内の精子を咀嚼し味わいながら飲み込んでいる。

「んくっ……こくっ……こくっ……ごくっ……ふう」

「ミカサ、口開けて見せてっ！！！！」

「……………？ ……んあー……………」

精子を飲み込んだ後のロマンコの状態を見たかった男は、ミカサに口を開けるように指示すると、ミカサは少し困惑した様子を見せたが、素直に男の顔に近づいて口を大きく開けてくれる。

「うわ……………」

まだ男の陰毛が口周りに付いているにも関わらず、それを取らずにミカサは口を大きく開けて見せつけてくる。

口内にはすでに精子は一滴も残っておらず、ミカサの唾液で口腔のブニブニとした口肉とペロは妖しく卑猥に輝いている。

男はミカサに対する愛おしさがたまらなくなり、右手で頬を愛でるように優しく撫でる。

「はあ……………ミカサ……………可愛いよ……………めちゃくちゃ可愛い……………」

「ん……そう……」

それを言われたミカサの頬がほんのりと上気したかのように赤くなるが、瞬間目を反らして口から出てきた言葉はそっけない反応だった。

ミカサが自身の口周りに付いている陰毛に気付いてそれを取ったあと、男がミカサを抱きしめる。

「ミカサ、精液美味しかった？」

「別に……必要なことだから……飲んでいただけ……美味しくなんてない」

男の胸に顔を埋めて頭を撫でられながらそっけない反応をするミカサ。

傍から見ればもはや恋人同士が夜の営みの会話をしているようにしか見えない状況である。

今日も二人は夜、空き部屋に来ては早速男は全裸、ミカサはグレーのスポーツ下着状態になり、まずはベットの上で絡み合いながらのディープキスをした後に、勃起した男のペニスに気付いたミカサがフェラチオをして今に至っている。

ミカサからフェラチオをすと言ったことに対して素直に応じた男。

実際すさまじい吸引ですぐさま射精を促す強力なドスケベフェラチオは気持ちいいのだが、ミカサが早く終わらせるために自ら進んでチンポを咥えているということになんともなく気付いている男。

男との行為を早く終わらせるために自らチンポを咥えているミカサの状況も、中々に背徳的で魅力はあるが、男は最終的にラブラブエッチがしたいためフェラだけで終わらせるわけにはいかない。

「んっ……また大きくなってる」

無意識のうちに工口筋肉ボディを触って勃起したチンポに気付いたミカサは、右手で摩りながら確かめるようにチンポを撫でている。

「……フェラチオ……する？」

(くはっ……かわいい……)

チンポを摩りながら男を見つめてフェラを進めてくるミカサに押されそうになる男だが、ミカサを強く抱きしめながら歯を食いしばり何とか堪える。

「ありがとうミカサ。でも今日はまた別の刺激で射精したいんだよ」

「別の……刺激……？」

「うん……ミカサ……ちょっと四つん這いになってくれるかな」

.....

.....

.....

「くっ……こんな……恰好……」

大分従順になってきたミカサの顔が、再び険しさを戻すくらい眉間に皺を寄せて不快なイラついた顔になってしまった。

というのも、今ミカサは四つん這いの状態になり、尻を上げている状態なのだが、その尻の前に男は顔を持ってきていたのだ。

「こういうスケベな格好をすることによって、より興奮してチンポの新しい刺激になるんだよ……では、失礼して……」

眼を血走らせ、今すぐにでもチンポを擦りつけたい衝動を我慢し、男は右手の人差し指をミカサのパンツにひっかけて、ゆっくりと下ろしていく。

「……っ！？ なにをっ！？」

下着を下ろされ焦ったミカサが男の方を向いて、左手を尻の方へやったが、うまく力が入らずにグレーのパンツは下ろされて、肛門が現れる。

「ゴクッ……大丈夫だよミカサ。とりあえず今日はここまでしか下ろさないから」

そういうと男はパンツから手を離す。

ミカサのパンツは肛門は見えているが、丁度秘部は見えないくらいの位置で止まっており、尻がケツセックスしたいかのようなおねだり下着ずらしの状態になっている。

晒されたピンク色の敏感な処女アナルが外気に触れていることにより、生々しくヒクついているのを、男は目を見開き脳に焼き付けるように見つめている。

「そんなとこ……見ないで……」

ミカサは必死に左手で自身の肛門を見られないように塞ごうとするが、その手を男は遮り、尻に顔が付くくらいの距離で肛門をまじまじと観察する。

「大丈夫大丈夫。ミカサの肛門、綺麗だし元気にヒクついているから。全然恥ずかしいことなんてないよ」

「……………っ！！！！！！」

まだ誰にも見せたことのない、恐らく本来の営みであればまじまじと見られることのない排泄でしか使用しない部位を見られ、さらには感想まで言われたことで、顔が焼けるくらいの恥ずかしさを味わい、歯を食いしばりベットに伏せるミカサ。

ミカサの右手は感情をどこにぶつけていいか分からないくらいの状態で、シーツを力強く握りしめている。

そんなミカサの羞恥アナルを見て、興奮しまくっている男は、顔を尻に着けて、鼻の穴を肛門に当てて思いっきり匂いを嗅ぐ。

「す—————は—————……ああ……あつ……はあ……はあ……」

「……っ！???? なっ……臭いなんて……くっ！！！！」

筋肉処女アナルは少し蒸れた汗の臭いと生臭いケツ穴の濃い匂いがし、一気に男の脳を直撃してあまりの快感から一瞬気を失いそうなくらいの性的興奮が襲い掛かってきた。

ミカサは男のあまりに不可解すぎる行為に怒りとイラつきが増して、殺意を含んだ眼つきで男を睨んでいる。

「はあ……はあ……ミカサのケツ穴すごくいい匂いだよ……生臭くて……エッチな匂いが……たまらないよ……」

「くっ……こんなことして……何の意味があるの？」

性的知識が乏しいミカサだが、これまでの男との行為でなんとなくだが何をすればいいかは分かっていた。

だがそれでも今男に匂いを嗅がれている部分は、他人にはっきりと見せる部位ではなく、排泄をするためだけのものだという意識が強いため、拒絶反応が他の行為より強くなってしまっている。

しかし逆にそのミカサの反発するような態度が男の性の欲望を刺激し、下半身を熱くさせていた。

興奮溜まらぬ男は、両手でミカサの尻を持ち、割れ目を広げるように開いてアナルをさらけ出させる。

「……っ！？」

「お尻の穴もチンポの興奮には重要な役割をもっているんだ。ほら、実際にヒクついているミカサのアナルを見てこんなに興奮してるんだよ」

そう言いながら男は括約筋に力を入れて、見せつけるように勃起した肉棒をピクピクと動かす。

先ほどフェラチオで射精したにも関わらず、ミカサのアナルの刺激によって既にギンギンの状態でカウパーを垂らしながら狂暴な顔つきを見せていた。

「うっ……くっ……」

ミカサはそのいきり勃った肉棒を忌々しそうににらみつけている。

そのミカサの意志に反応するかのよう、アナルは力強くその穴を閉じている。

(こんなのもうたまらないっ！！！！)

固く閉ざした筋肉アナルが目の前にあるなら、こじ開けたくなるというのが漢。

男はまだ排泄以外の感覚を知らない綺麗なピンク色の筋肉処女アナルに向かって顔を近づけて、舌を突き出し優しく一舐めする。

「ぺろっ……」

「ひゃあああああっ！！！！」

ミカサの身体と敏感アナルが驚きでビクつき、皺の一本一本が生々しく蠢いた。

「嫌っ！ そんな汚いところ、舐めないでっ！！」

尻の穴に舌のぬめつとした感触を感じて、さすがにミカサも左手をイヤイヤしながら明確に男の行為に反発してくる。

「汚くないよ！ ミカサの身体に汚いところなんて一つもない！ 味も抜群に美味しいよ！」

男の口の中にはミカサのアナルに付着した汗のしょっぱい味や、少し苦みのある痺れるような味が広がっており、本来であれば好んで味わうものではない味なのだが、ミカサのケツの穴ということで男の脳には甘い刺激が漂っており再び菊門を舐めるため舌を動かした。

「美味しいなんてそんなわけっひゃあああっ！！！！」

「ぺろっ！！ ぺろっ！！ れろっ！！ ぺろっ！！ れろっ！！」

男はミカサのアナルを夢中で舐めだす。

舌先に力を入れて、表面の皺を一本一本なぞるようにして尻の穴の入り口をほぐすようにして丁寧だが勢いよく舐めまくる。

「くうっ……うっ……ふっ……くふっ……」

「んくっ……んあつくっ……」

(ケツの中の締まり……キツすぎるっ！！ だけど……)

男はミカサの尻を持っている両手に手跡が付くくらいグッと力を込めて押さえ付け、舌先に神経を集中させて少しずつうねる様に腸壁を舐めていく。

「れろっ……くちゅ……ちゅるっ……じゅるっ……くちゅ……」

少しずつだがミカサの肛門から腸液が漏れてきて、それが唾液と混ざり合いよりアナル内で舌を動かしやすい潤滑油となる。

「はっ！！ はああっ！！ んくっああっ！！ くふっ！！」

ミカサはもはや我慢するというよりも、悶えるような表情になり未知の性的快感の扉が開きそうになっているのを何とか堪えているのだが、涎を垂らしてだらしなく口を開けながら艶声を漏らしている姿はアナル絶頂を待ちわびているようにしか見えない。

先ほどまでの反発が一瞬でなくなるほど、クールな筋肉美少女はアナルに耐性がなく、背中を逸らせて腸壁からくるペ口の刺激に体を震わせシーツを握りしめ逃れようとしていた。

「ふっつうう……つつ！！ ああっ！！ うくっ！！」

だが男は逃がさない。

ミカサが身体を前にやろうとして無理やり逃げようとしても、尻を掴む手の力をさらに強めて、舌の動きを強くし、肛門を攻めまくる。

「にゅるっ！！！！ じゅるっ！！ ずちゅっ！！ くちゅっ！！」

腸壁と絡み合うように舌を動かしていくと、段々と肛門の締まりが緩くなり抽送できるくらいの余裕が出てきた。

その余裕ができた隙間からミカサのケツ汁が口の中に入ってきて、一気に男の口内から脳に極上の筋肉尻汁の味が染み渡る。

(うまつ！！！！ 肛門から垂れてくる汁がこんなにうまいとかっ！！ たまんねえー！！！！)

「んじゅっ！！！！ んちゅっ！！！！ くちゅっ！！！！ んっ……れろっ……れろっ！！！！ えろっ！！ えろっ！！！！」

濃厚なケツ汁を飲むことによって興奮が増した男は、舌を最大限に固くして激しく抽送を開始する。

ケツ汁と唾液の交わったピチャピチャとした水音と、まだまだ硬さのある尻の穴から時折空気のようにブユツッと漏れ出てくる下品な淫音が室内に響き渡る。

「ひゃあっ！！！！ あああっ！！！！ くうっ！！！！ あああああ！！！！ やめっ！！！！ てっ！！！！ お尻っ！！！！ くああああっ！！！！」

自身の尻から聞こえてくる排泄音以上の下品な音と、腸壁を舐めまわされ肛門内を犯されている刺激が脳に痺れるように響いてきて、耐えられなくなってきたミカサは嫌々するように頭を左右に振っている。

膣内で快感を得ることに對しては正常なことだということは本能で分かっていたミカサだが、尻の穴は完全に排泄でしか使わない穴だという認識しかなかったため、性的快感を味わっていることが信じられずに脳がぐちゃぐちゃになっている。

それゆえ表情ももはやそこに反発するという意思などなく、緩みきった口元からは涎が大量に漏れ出ており涙を浮かべながら絶頂しないように耐えることだけで精いっぱいの状態だ。

そんなミカサの尻に顔を打ち付けながら、さらに舌も動かして、強引にケツ穴を拡張させようと男は必死に抽送を続けていた。

ビチンッ！！　ビチンッ！　ビチンッ！！！！　ビチンッ！！

「じゅるっ！！！！ んまつ！！！！ んあっ！！！！ あっ！！！！ れろっ！！！！ えろっ！！！！　ぢゅるっ！！！！」

必死に舌を動かして筋力のすさまじい尻穴を責め立てる男。

最初のころよりも腸内は大分ふやけて、尻内の肉壁もベ口と絡み合いながら愛情を受け入れるかのように嬉しそうに腸液を垂れ流してくる。

「くあっ！！！！ いやっ！！！！ だめっ！！！！ お願いっ！！！！ ダメっ！！！！ ああっ！！！！　くあっ！！！！ うくっあっ！！！！」

ケツイキ間近のミカサが男にやめるように言うのだが、もはや逆に尻穴を攻めてくれとおねだりしているようにしか見えない。

実際ミカサの身体はエビぞり、全身の筋肉が物欲しそうに躍動して、震えている。

秘部からは既に愛液が漏れており、グレーのスポーツパンツは男の唾液とケツ汁と愛液でシミが付いていない部分が少ないくらいだ。

(ケツイキしろミカサっ！！！！　筋肉震わせながら……可愛くケツ絶頂しろっ！！！！)

ビチンッ！！！！

を見ている。

普段はキリッとしてクールな女性というイメージのあるあのミカサが、ケツ穴を舐められて穿られたくらいでこんなにも快楽を感じ、だらしなく下品に尻を突き出した状態で放心する姿に、あまりのギャップでそれだけで男は射精してしまいそうになる。

「くうううううっ！！！！！！」

男は必死に歯を食いしばり、生々しく蠢きヒクつきながらチンポを誘うピンクの肉花に挿入したい衝動を必死に我慢して、尻の割れ目に沿う様に勃起肉棒を這わせる。

「んっ！」

熱々のペニスが尻の割れ目に着いた瞬間、驚いたように筋肉桃尻が一瞬ピク付ついた。

腰を振りたい衝動を抑えきれなくなった男は、ミカサの鋼鉄の腰を両手で掴んで勢いよく尻コキをやり始める。

「はあっ！！ はあっ！！！！ はあっ！！！！ ミカサっ！！ お尻の穴舐められて、気持ちよかったっ？」

「んあっ！ あっ…んっ……くふっ……別に……気持ちよくなんか……くっ……」

絶頂後の朦朧とする意識の中でも反論してくる気高き精神をもったミカサの尻に、先端から汁を垂れ流しているグロテスクな自身のチンポを擦りつけているという事実がさらに興奮させ、ぐつぐつと下半身が煮えてくる。

ペチンっ！ ペチンっ！ と互いの肉が弾け合う音を立てながら射精するため男は必死に腰を動かしている。

男は亀頭を筋肉処女アナルに挿入しそうなくらい押し付けながら、我慢汁のぬめりを使って何とか割れ目に沿って流れるようにズリュッと尻コキを行っていた。

ミカサの尻の割れ目は既にカウパーでドロドロになっており、それが潤滑油となりよりスムーズに肉棒が割れ目を行き来しており、そこから段々と摩擦による熱さも感じられてきた。

絶頂後の敏感なアナルは亀頭とキスしながら出てきている我慢汁を恋しそうに蠢きながら吸収しており、ミカサの口からも段々と艶のある声が漏れ聞こえてくる。

「んあっ♡ んっ♡ くふっあっ♡ んんんっ♡」

すでに一度ケツ絶頂を味わったミカサの脳は今、混乱しており意識も途切れ途切れの中、男に尻をいように使われている状態。

「はあっ！！ はっ！！ はっ！！！！ はあっ！！！！」

男が腰を打ち付けるたびに、柔らかい桃尻が打ち震え喜んでいるように見える。

腰を掴んでいる両手からも筋肉の硬直が伝わってきて、肌からミカサが快楽を感じているのを我慢しているということが伝わってきていた。

「くうあああうああうああうあああああっ！！！」

射精寸前の膨張したペニスをラストスパートの勢いで、思いっきり力強くミカサの尻に打ち付ける男。

「んあっ♡ んあっ♡ んあっ♡ んああっ♡」

敏感アナルに強烈な一撃を受けて、声を漏らしながら、ケツの穴を無意識のうちにヒクつかせてしまっているミカサ。

アナルは既にチンポ受け入れ態勢ばっちりなくらい内側の腸壁を見せばつくり広げられており、そこに男は打ち込むように亀頭を叩きつけていた。

「射精るよっ！！！！ ミカサっ！！！！ ミカサの尻に思いっきりぶっかけるっ！！！！ マーキングするっ！！！！」

血管が切れそうなくらい射精を我慢してグロテスクに肥大したカウパー濡れ濡れで射精寸前の亀頭をアナルに打ち付けたその時……

ズリュっ！！！！

「んはっ！！！！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

「あっ……………」

口を開けていたミカサの肛門に勢いよく突かれた男の勃起ペニスが根元まで入ってしまった。

そして、

ドピュユユユユ！！！！ ドピュユユユユユっ！！！！ ビュルルルっ！！！！ ビュルッ！！！！ ビュルッ！！！！ ビュルッ！！！！ ビュルッ！！！！

「ふああああああああああああああああああああああ♡♡♡♡」

「うっくっううううう！！！！！！！！！！」

射精寸前のチンポをミカサの筋肉アナルが逃がすわけもなく、挿入された瞬間に、一気に肉壁がチンポを強烈に締め付けて射精を促した。

ミカサは腸内に灼熱のドロドロマグマ精子を一気に流し込まされて、すさまじい快楽を感じながらベットが軋むくらいの激しい痙攣をして絶頂する。

「ううう♡ ああああああ♡ あああ♡ ああつ……♡」

口を開け涎を垂らし、目は朦朧としており完全なイキ顔を晒しながら絶頂を迎えたミカサは、失神したように身体を支える力をなくし倒れたようにベットに伏せた。

ぶびゅっ！　ぶひゅっ！！　ぶちゅっ！！　ぶちゅ……

四つん這いから寝バックの状態に倒れてしまったミカサは、まだペニスの刺さっている肛門からだらしなく下品な排泄音を漏らしながら精液を垂れ流した。

「はあ……はあ……はあ……」

(やってしまった……)

男は今、挿入するつもりはなどなかった。

だがしかし、ミカサの敏感なチンポ媚びアナルが汁をダラダラ流したペニスを逃がすわけもなく、油断した男の一突きに便乗して口を大きく開けて腸内へ誘ったのだ。

一気に肉棒に隙間なく絡みつかれたことで射精を我慢する隙を与えずに、情けなくアナル内で射精してしまっていたことに啞然としてしまう男。

(どうしよう……)

男の計画としては、ミカサから自発的にチンポを挿入したいということを書かせてからのセックスという形だったので、この非常事態に思考が停止してしまっていた。

「……………ごくっ……………」

「うっ……くっ……あっ……………」

だが、男の下で両手を広げガ二股に足を開き、ケツを痙攣させながら失神している絶好の筋肉美少女の姿を見て、また下半身がむくむくと力を取り戻していく。

アナル内で再び肥大化したペニスを待っていたかのように肉壁が蠢くように絡みついてきて、射精直後の敏感な裏筋や血管を隙間なく埋め、刺激していく。

試しに男がチンポを抜こうとすると、

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

思わず声が漏れてしまうくらい、腸壁がチンポを締め付けてきて別れを惜しんでおり、菊門は捲れ上がって内側の腸壁が盛り上がるようにチンポに絡みつき喰らいついてきていた。

「うっ！！！！　くっ！！！！」

男は肉棒を先端の部分まで引き抜こうとして思いとどまったように止める。

「はあ……はあ……はあ……ミカサ？」

「うう……あっ……うっ……」

ミカサに問いかけてみても唸り声が聞こえてくるだけで確かな返答は帰ってこない。

本来であればここはチンポを引き抜いてミカサの回復を待った方がいい場面だと思われたのだが……

「ごくっ……」

男は無我夢中で気絶したミカサとアナルセックスを始めてしまった。

「はっあ！！！！ はあっ！！！！ はっ！！！！ ミカサっ！！！！ 好きだっ！！！！ ミカサっ！！！！」

背後からミカサの身体を抱きしめて愛を叫びながら狂暴なペニスで筋肉アナルを墮とそうと必死にピストン運動をする。

ギシッ！！！！ ギシッ！！ ギシっ！！ ギシッ！！

パンッ！！！！ パンッ！！！！ パンッ！！！！ パンッ！！

先ほどの尻コキよりも力強く腰を打ち付けることで、ベットが激しくきしみ揺れる。

肉がぶつかり合う淫音も室内に響き渡り、ミカサとセックスをしているという現実が男の脳を刺激する。

意識を失っているにも関わらず、ミカサのアナルの腸壁は男の精液を求めるかのように強くペニスを締め付けてピストン運動を歓迎していた。

時折ブビュッ！！ と下品な肛門の排泄音を出し、中に入った精液を垂れ流しながらも、自身も腸液を出しながらチンポの滑りをよくしている。

「ミカサっ！！！！ ミカサっ！！！！ 愛してるっ！！！！ 好きだっ！！！！ ミカサああああああああああ！！！！！！！！」

男は激しく腰を打ち付けながらミカサの耳元で愛を叫びまくって興奮を高めていた。

その男の問いに答えるようにミカサの筋肉が痙攣し、アナル内の締め付けがさらに強まりチンポを締め付ける。

グロテスクに熱く肥大した肉棒を、愛液を流しながら歓迎し、チンポに負けじと熱さを交えながら排泄音を出して刺激してくるミカサの無意識アナル。

もはや男のチンポの形を覚えたとしか思えない締め付けに、我慢できるはずのないペニスは再び射精するため、一気に精子を放り上げる。

「くそおおおおおおお！！！！ ミカサっ！！！！ 好きだっ！！！！ 好きだっ！！！！ 好きだっ！！！！！！！！」

アナルセックスまでしているが結局ミカサの心までは手に入れることができない現状に切なさを感じ、逆にそれが男の興奮をさらに引き立てて腰を打ち付ける力を強めてしまう。

意識を失っているというのに男は遠慮なしにミカサに性の暴力を打ち付け体内に自分の遺伝子を排出した。

「くああああああああああああ！！！！ ミカサっ！！！！」

ドピユユユユユ！！！！ ドピユユユユユ！！！！ ビュルルルっ！！！！ ビュルッ！！！！ ビュルルルっ！！！！

「んあっ♡ んくっ♡ うくっ♡ んんっ♡」

意識を失っているにもかかわらずミカサは身体を震えさせ、まるで男の性を受け入れるように喘ぎ声を漏らしながら気持ちよくなっている。

ブビュッ！！ ブビュッ！！ ブビュッ！ ブビュッ！

再び排泄音を流しながら入りきらなかった精液がミカサの尻に流れてきた。

「はあ……はあ……はあ……ミカサ……好きだ……」

ミカサの身体に覆いかぶさりながら射精後の気怠さに身を任せる男。

失神しているミカサとアナルセックスしてしまった背徳感と、罪悪感の闘いあいのなか過去一番の射精を腸内でしてしまった。

「んっ……くっ……」

さすがに重さがありそうなので、ミカサの身体から起き上がってチンポをアナルから引き離す。

ヌポっ……ブビュッ……

だらしない下品なケツイキ状態のミカサの尻の穴はぱっくり男のチンポの大きさに開いておりヒクヒクとヒクつきながら精液を垂れ流す。

「ごくっ……」

普段のミカサからは考えられない状態になっていることに、興奮した男は再び肉棒を勃起させて、アナルの中へ自分を認識させるためにチンポを挿入し再び抽送運動を繰り返す。

ミカサのだらけきった失神顔にキスしながら再び愛を叫び、その日は回数が分からなくなるくらい腸内射精をしまくった。

5

次の日。

「ミカサ……今日も可愛い……くちゅ……んちゅ……れろっ」

「くちゅ……余計なことは……くちゅ……ちゅぱ……れろっ……言わなくていい……はむっ……んあっ♡」

失神アナルセックスからの翌日。

特に何事もなかったかのようにまた空き部屋に来ては、立ったまま始まりのディープキスを行う二人。

男が何気なく昨夜のことを聞こうとすると、ミカサの目が沈み無言の圧力を感じたので

深くは掘り下げないことにしていた。

それよりも昨夜予期せぬアナル挿入があったにもかかわらず、ミカサが来てくれたことに安堵と興奮を交えながら抑えられなくなった感情を爆発させるように抱き着いて唇を貪りだした。

「全然余計なことじゃないよ……くちゅ……んあぁっ……れろっ……ミカサが可愛すぎてたまらないんだ……くちゅ……ミカサ……ミカサ……」

アナルとは言えミカサと一つになったことで、男のミカサへの想いのブレーキが効かなくなってきていた。

.....

.....

.....

「ミカサ……好きだ……くちゅ……れろっ……セックスしたい……れろっ……んちゅ……」

「っ……！？ くちゅ……れろっ……セックスは……くちゅ……れろっ……しない……れろっ」

(私のことを好きなんて……違う。これは彼がセックスしたいだけの方便。そんなわけない)

想いを告げた男は抱きしめる力を強め、さらに口茎を犯すため激しくペ口を動かした。

心の中では男の言葉を否定しているミカサだが、身体は反応しているようで、無意識のうちに男の腰に腕を回し優しく抱きしめて、もっと唾液を求めるように男の舌に自身のペ口を絡めている。

「んっちゅっ♡ くちゅ……じゅるっ……くちゅ……じゅるっ……♡」

男の身体とがっちり抱き合っただけで貪るようにお互いの舌を絡める行為に、ミカサの下半身がズキンツと疼いて性的な切なさに包まれる。

ミカサ自身も気づいてしまうくらいに、キスによって秘部から愛液が漏れてきてしまっていた。

(ダメっ……なんでっ……)

顔を赤らめながらも眉根をくねらせ必死にディープキスの気持ちよさを我慢しようとしているミカサ。

二人の温かい舌が激しく絡み合い、ミカサは流れ込んでくる大量の男の唾液をどんどん

体内に取り込んでいってしまう。

「んくちゅ……じゅるっ……んくっ♡ ごくっ♡ くちゅ……れろっ……じゅるっ……ごくっ」

もはや当初の勃起の治療などということは忘れていたかの如く、男の唾液を摂取し続けるミカサの表情に嫌悪感などはなく、それは必死に快感を耐えようとしている艶やかなものとなっていた。

男の唾液が体内を巡ることによって下半身の切なさは増していき、秘部はもちろんのこと、アナルまでも疼きだしてくる。

(身体が……どンドン……熱くなって……キスで……)

絶頂を迎えそうなくらい感じてしまっている自分を頭では否定しているのだが、快楽により脳が痺れてミカサの身体は小刻みに震えてしまっている。

「あんっ……んあっ……はぁ……はぁ……ミカサ……ベ口……思いつきり伸ばしてくれる？」

「んっ……くうっ……えー」

(ダメっ……こんなことっ……絶対っ……)

男の要求から明らかに強い刺激が来ることは明白で、頭では抵抗しないといけないことが分かっているながらも、無意識に身体が甘美な感覚を求めてしまい、ミカサは言うとおりにベ口を突き出してしまふ。

男と連日キスを繰り返す、チンポを舐め精液を含んだこともある口内は唾液を多く含み糸を垂らしながら妖しく蠢き輝いて待っていた。

男は右腕でミカサの頭を抱えるように後頭部を抑えて、イヤらしく伸びているベ口を喰らうように口に含んだ。

「あー……はむっ！」

そして男はミカサの舌を甘噛みした状態で、自身の顔を後方へ下げながら、歯でベ口をなぞっていく。

「んんっ！！！！！！！！んあっ♡」

少し強めに噛まれたことによって舌から痛みが伝わってきて、それが脳内で甘美な刺激に変換されてミカサはビクンッと大きく震えてしまふ。

(私っ……舌を……噛まれてっ……)

「あえっ……あっ……ああっ♡」

ブニブニとした触感を楽しんでいる男の歯から逃れようとして舌を引っ込めようとしても、引っ張られて逆に痛みが増して感じてしまう。

腰をがっちり固められ、後頭部を優しく撫でられながら舌を犯されてしまい、秘部が濡れ絶頂が近くなり切なさが増して男の腰を思いっきり抱いてしまっているミカサ。

筋肉美女の肉体が絶頂躍動していることに気づいた男は、舌先にカリッと力を強めて噛みつき思いっきりペ口を引っ張ることで絶頂へといざなった。

「んっ————っ！！！！」

「ひいひゃあああああああああああ
あああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！ はっ！ はがっ！！ ひゃああ
あああっ♡♡♡」

筋肉をぶるぶると痙攣させ、目を見開いて思いっきり絶頂してしまうミカサ。

「んっ……んあっ……はあ……気持ちよくなっちゃった？ ミカサ？」

「んあっ♡ はあ♡ はあ♡ ひよんなこと……ない」

(こんなことで……気持ちよくなんて……私の身体……)

舌を突き出したまま、痛みの残るジーンとした感覚に心地よくなってしまっている。

そんなミカサの突き出たペ口を労わるかのように、男が舌で舐めてくる。

「れろっ……れろっ……れろっ……えろっ」

「んあっ！ あふあ♡ あっ♡ あああ♡」

下品に唾液の糸を伸ばしながらペ口をなぞるざらつきが恋しくなり、最初は舐められているだけだったが、段々とお互いの舌がどちらからともなく絡み合っていく。

「んくちゅ……じゅるっ……んばっ……れろっ……くちゅ……んあっ……ミカサ……服…
…脱がすね」

「くちゅ♡ んっ……あっ……わかった」

(裸を見せないと……彼は興奮しないから……だから……)

ミカサは自分が素直に従っているのはあくまで勃起の治療であり、決してより刺激を求めるわけではないと言い聞かせながら身を委ねる。

「んっ……」

男がシャツのボタンを下の方から開けて鍛え抜かれた腹筋が晒される。

女体の肌はうっすらと汗をかいており、少しキツめの蒸れた匂いを出しているのだが、湿った輝きを帯びたその身体と整った顔立ちのおかげで、性的興奮を増す香りになっている。

「す————は————……かぁ～♡ たまんない匂い」

「くぅ……そんなに……嗅がないで……」

(今日は……いつもより……汗……かいてる)

上半身を脱がせた男は、その蒸れた筋肉裸体を見た瞬間たまらなくなり、匂いを嗅いで射精しそうになる。

ミカサは男の執拗な攻めで絶頂してしまわないように、雑念を払うためにトレーニングをして汗をかいていたのだが、逆にその汗が男の欲望をより一層させてしまっていた。

いつもよりもキツめな汗の臭いが自分でも分かり、それを嬉しそうに嗅がれていることに恥ずかしさが強くなり、羞恥で赤くなった顔を背けて歯を食いしばっている。

「ミカサの汗の臭い……すごく興奮するよ……ほら」

男は一瞬で全裸になり、今すぐにでも破裂しそうなくらいパンパンに膨れ上がった肉棒を見せつける。

「……………」

ミカサが下を向いて確認すると、寂しそうにしてプルプル震えて涙を流している亀頭と目が合った。

(ほんとに……苦しそう……)

「……………ゴクツ」

相変わらず赤黒く血管をバキバキに浮かせて勃起しているチンポを見ると、なんとなく心配になってくるミカサだが、今はその感情と一緒に別のナニかも熱くなってきている。

ミカサはそっと左手を順手にしてチンポを握る。

(熱くて……硬い……)

すでに興奮して射精間近で高温になっているチンポの熱さと硬さが肌を通して伝わってくる。

ミカサは睾丸部分まで手で覆いながらブニブニとチンポを摩り始める。

「うお……」

(すごい見た目をしているけど……ブニブニしてて……)

まるで愛おしそうに夢中になって睾丸を揉み込みながら裏筋を摩るように扱き始めるミカサ。

段々と手の動きを速めながら射精を促すようにチンポを刺激されて男もたまらず声を漏らしてしまう。

(また……硬くなってきた……んっ♡)

ブリュンブリュンと睾丸を玉袋の中で弄びながら、チンポの硬い感触や玉袋のブニツとした感触を楽しんでいる内に、ミカサの秘部と尻の穴が疼いてくる。

「あっ……」

無意識のうちに自分の身体がナニを求めているのかがなんとなく察したミカサは急にそのことを恥じて、左手を離して悔しそうな表情でそっぽを向いてしまう。

(違う……私は……)

「……ごくっ」

自分の身体と戦いながら小刻みに震えているミカサの身体を見て、なんとなくそのことを察した男は、生唾を飲み込み女体の下半身を脱がしにかかる。

「んっ……」

ベルトを緩められ強制的にズボンが脱がされているのだが、最後は脚を上げてちゃんと協力するミカサ。

ズボンを脱いだことによってミカサの筋肉体は白のスポーツ下着のみの状態に剥かれてしまった。

すでに何度も見られたことのある下着姿なのだが、さすがにまだ見られることに慣れないのか、それとも秘部が少し湿って下着が濡れていることが気になるのか、筋肉美少女はモジモジしている。

「相変わらず可愛い筋肉してるねミカサ。いや、ミカサが可愛いから筋肉も可愛く見えるのかな？」

「んっ……なにを言っているの？」

男の発言に首を傾げるミカサだが、可愛いと言われて下半身に鈍痛のように切なさが入り込みに上がってきていた。

そんなミカサの状態を知ってか知らずか、男はまず汗蒸れ腹筋に顔を近づけ舐め始める。

ら、その動きを上へ上昇させる。

「んっ……はあっ♡ くうう♡」

(次は……胸を……)

男の顔がどンドン下乳付近へ来たことにより、次は胸を攻められると予想したミカサは、恐らくブラを取られると思い、恥ずかしさもあり顔を背け目を細めてしまう。

(えっ?)

しかし予想は外れ、男はミカサの右腕を上げて、上半身の中でもかなりの蒸れスポットである脇の臭いを想いっきり嗅ぎだした。

「す————はあああああ……はああああ♡」

濃厚な汗のおいと混じり、ミカサの濃いキツめの体臭が溜まっていた脇の臭いを嗅いだことにより我慢汁をあふれ出しながら、幸福感で朦朧としている男。

「……っ!? なにを……」

脇の臭いを嗅ぎ、うっとりとしている男を見てドン引きしながら、攻められると思わなかった部位の臭いを嗅がれているということに驚いているミカサ。

「ミカサの脇マンコ……いただきます……れろっ……えろっ……ぴちゃっ……くちゅ……んちゅ……じゅるるるるるっ」

「ひゃああっ!! ダメっ♡ 脇なんてっ!! 舐めっ! くああっ!! 舐めないでっ♡」

普段人に見られることのない部位であり、ましてや匂いを嗅がれるなど思ってもいなかったところをさらに舐められ攻められるという状態にミカサの脳が混乱してきしまっている。

自身で触れることもそんなになく汗くさ敏感脇マンコから、男の舌のざらついたヌメツとした感覚が執拗に伝わってきて、その感覚から逃れるように小刻みに筋肉が震えてしまっている。

(脇で……こんな……)

ミカサは脇を舐められていることで下半身の満たされない欲求が強まっていることに気付いて、それを否定するように身体をくねらせてしまう。

「れろっ……おいしいよ……ミカサの脇……最高に……れろっ……くちゅ……興奮してる……じゅるるるるるっ!!! 脇を舐められて気持ちよくなってるミカサも可愛いよ……れろっ」

「訳の……くっ……分からないこと……言わないで……んんっ♡」

悶えるミカサをさらに責め立てるため、男は脇を舐めながら右手をブラの下から潜り込ませて、ミカサの左乳の乳首を弄りだす。

「はあああああああああっ♡」

男が強めに乳首を摘まみ、おっぱいを引っ張ったことにより、胸からも強烈な刺激が来たことで艶声を響かせるミカサ。

その強烈な一撃で、秘部がジワッと濡れてパンツのシミが広がっていく。

人一倍鍛えている筋肉体にも拘らず、もはや多少の痛みも快樂へと変換されてしまうミカサの身体。

「んっ……くっ♡ うう……くっ……」

なんとかして性の快感から逃れようと男を引きはがす為に腕に力を入れようとするがうまく力が入らずに、むしろもっと男にしてほしいかのような動きになってしまっている。

左腕を自身の胸を犯している男の手に被せるような形になってしまい、右手は脇を閉めようと頑張るも小刻みに震えるばかり。

「はあっ♡ んっ♡ んあっ♡ やめっ♡ くう♡」

(私の……身体……一体……どうしてしまったというの……)

ダメージを受けることも耐えることができるくらい鍛え上げた見事な肉体は今、脇を舐められ乳首を摘ままれたことによって情けなく感じながら痙攣してしまっていた。

「れろっ！ くちゅ！ じゅるっ！！ ちゅるっ！ くちゅ！」

男はさらに脇を舐める力を強めながら、ミカサの胸も弄っていく。

下着の下で卑猥に蠢く男の右手を遮るように左手を被せるミカサだが、男と一緒に自身の胸を弄っているようにしか見えない。

「はっ♡ くはっ♡ あああっ♡ んあっ♡」

(だめっ！ これ以上はっ！！ また……さっきみたいにつ！！)

執拗な男の攻めに対して、ミカサの切なさも下腹部辺りから込み上げてきて、絶頂が近づいてくる。

「ミカサっ！！ れろっ！！ ミカサっ！！ じゅるっ！！！！
ちゅうううううううううう！！！！！！！！！！」

そんなミカサを絶頂へいざなうように、男が脇にもキスマークを付けるくらいの勢いで想いっきり吸い付きながら、乳首を掴まんで引っ張る。

「あっ！！！！ あああああああああああああああああ！！！！」

脚をガ二股に開き、身体を勢いよく震えさせながら口を大きく開き涎を垂らしながらもミカサはまたもや絶頂してしまう。

「はっ……はぁ♡ あっ……」

「おっと……」

2度目の絶頂で腰が抜けてミカサが倒れそうになったので、男が優しく抱きかかえて、バサッと勢いよく二人はベットに倒れるように寝て、男がミカサの上になる

「んんっ♡ はぁっ♡ くはっ♡」

(なんて……こんな……身体が……)

これまでの男との営みで明らかに以前とは変わってしまった自分の身体に驚きを隠せないでいるミカサ。

そしてミカサは段々と自身の下腹部からくる切なさの正体に気付きつつあった。

そんな切なさが爆発しそうな秘部に力強く男の一物が布越しに押し付けられる。

「あっ♡」

パンツを挟んでいるにもかかわらず、男のいきり立った肉棒の熱さが膣口から伝わってきてミカサの脳に刺激を与え、さらには腹の奥底が物欲しそうに疼いているのが自身でも分かってしまう。

「ミカサっ！！！！ セックスしたいっ！！！！ 我慢できないんだっ！！！！」

「んっ……」

男が目を見つめて要求してくるのを、知らないふりをするかのようにミカサは顔を背けて目を反らす。

「一回だけでいい！！！！ セックスしたらそれでこの関係も終わりでもいいからっ！！！！
お願いだよミカサっ！！！！ 好きなんだミカサのことがっ！！！！」

「くっ……」

(また……そんなこと言って……)

セックスしたい方便を聞かされて頭の中ではうんざりしているミカサなのだが、同時に

下半身から好きと言われて嬉しそうな疼きを感じている自分の身体に腹が立ってきている

「ミカサっ！！ 好きだっ！！ セックスしたいっ！！！！ セックスっ！！！！ セックスっ！！！！」

男は思いを伝えながら、ミカサの身体にも伝わるように腰を動かし始めチンポを膣口に擦りつけ出す。

「んんっ♡ くっ♡」

男が一突きするたびに鈍痛のように膣から刺激が全身に響き渡り、それに感じないように歯を食いしばって耐えるミカサ。

(こんなこと……続けるくらいなら……)

さすがのミカサも自分の身体がおかしくなったことに耐えられなくなってしまっていたので、早く関係を終わらせたいとは思っているのだが、なかなか踏ん切りがつかないでいた。

「んっ……くっ……考えさせて……」

「えっ……」

ドッピユウウウウウ！！ ドピユっ！！ ビユルルルっ！！ ビユルッ！！ ビユルッ！！

「んあっ！！ んんんっ♡」

その瞬間、セックスは拒んでいたミカサからの少し前向きな返答に驚いた男は射精していた。

そして精液はミカサの腹筋に大量に降り注がれ、灼熱のような熱さが腹筋から体内へ伝わり、またしても鈍痛がミカサを襲ってくる。

「ミカサ……セックスしたいっ！！ 絶対にセックスしたいっ！！！！」

「だから……少し……考え……んっんっちゅっ！！！！ くちゅっ！！！！ じゅるっ！！！！ ちゅるっ！！ れろっ！！！！」

男はだめ押しするかのようミカサにキスをした。

そして……

……

……

.....

「.....サ.....カサ.....ミカサっ！！」

「っ！？」

「おいミカサ、どうしたんだよ。なんか今日お前変だぞ？」

訓練終了後。

虚ろな表情をしていたミカサにエレンが気になって話しかけてきた。

「ほんとだよミカサ。どうしちゃったのさ？ 心ここにあらずつて感じだよ」

一緒にいたアルミンも心配して声を掛けてくる。

「.....」

ミカサは二人の顔を、特にエレンの顔をまじまじと見る。

「？どうした？」

(エレン.....やっぱり私は.....)

エレンの顔を見て決心したかのように、虚ろな表情から生気が戻ってきた顔色に変わっていき、キリッとした顔つきに変わるミカサ。

「エレン.....大丈夫」

「？なにがだよ？」

「すー.....はー.....」

(大丈夫.....私は.....大丈夫)

深呼吸して気持ちを落ち着かせた後、ミカサはまるで巨人を駆逐するような凄みのある表情を見せる。

「大丈夫.....私は (チンポに) 負けない.....絶対に (チンポには) 負けない！」

「おっ.....おう.....」

すさまじい迫力を放ち、思わず他の兵士たちもビクつかせるような気迫でエレンに迫りながら、絶対にチンポに勝つと宣言するミカサ。

改めてエレンに宣言し、身体に力を込めて、確固たる鋼鉄の意志でミカサは断固として己の快楽を拒否する宣言をして男との勝負に挑もうとする。

(これで.....終わらせるっ!!!)

その姿を見たものなら、この鋼の意志と肉体をもつ筋肉美少女ならどんなことがあろうと、一度決意した信念を曲げるはずがないと思うことだろう。

そう、これまで幾多の苦難を乗り越えてきたミカサが高々チンポなんかに負けるはずがないのだ。

たとえ犯されまくったケツ穴が疼こうとも、

たとえクンニされまくって膣内が唾液と愛液でドロドロになろうとも、

たとえ鍛え上げた全身の筋肉を舐めつくされようとも、

たとえチンポが膣内をかき回して子宮口を責め立て、膣内射精されて、膣肉が男のチンポの形を完全に覚えて物欲しそうにもう一度精液欲しさに蠢こうとも、

ミカサが絶対にチンポなんかに負けるはずがない。